

# 雪国十日町の暮らしと民具

重要有形  
民俗文化財

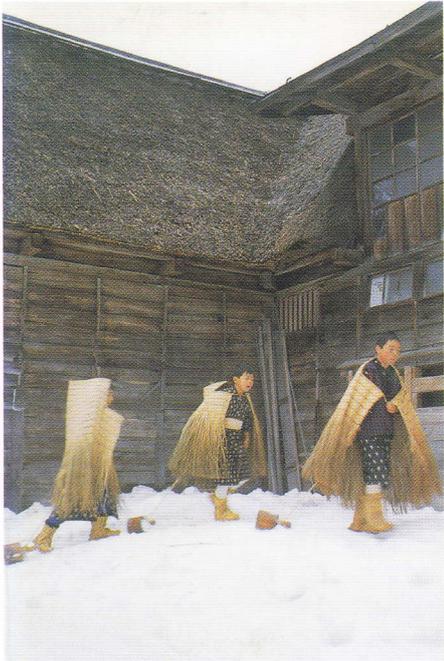
十日町の積雪期用具図録



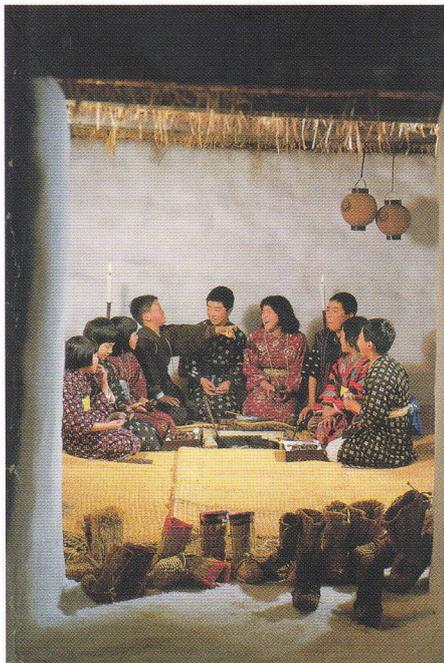
十日町市博物館



節季市で売られるチンコロ

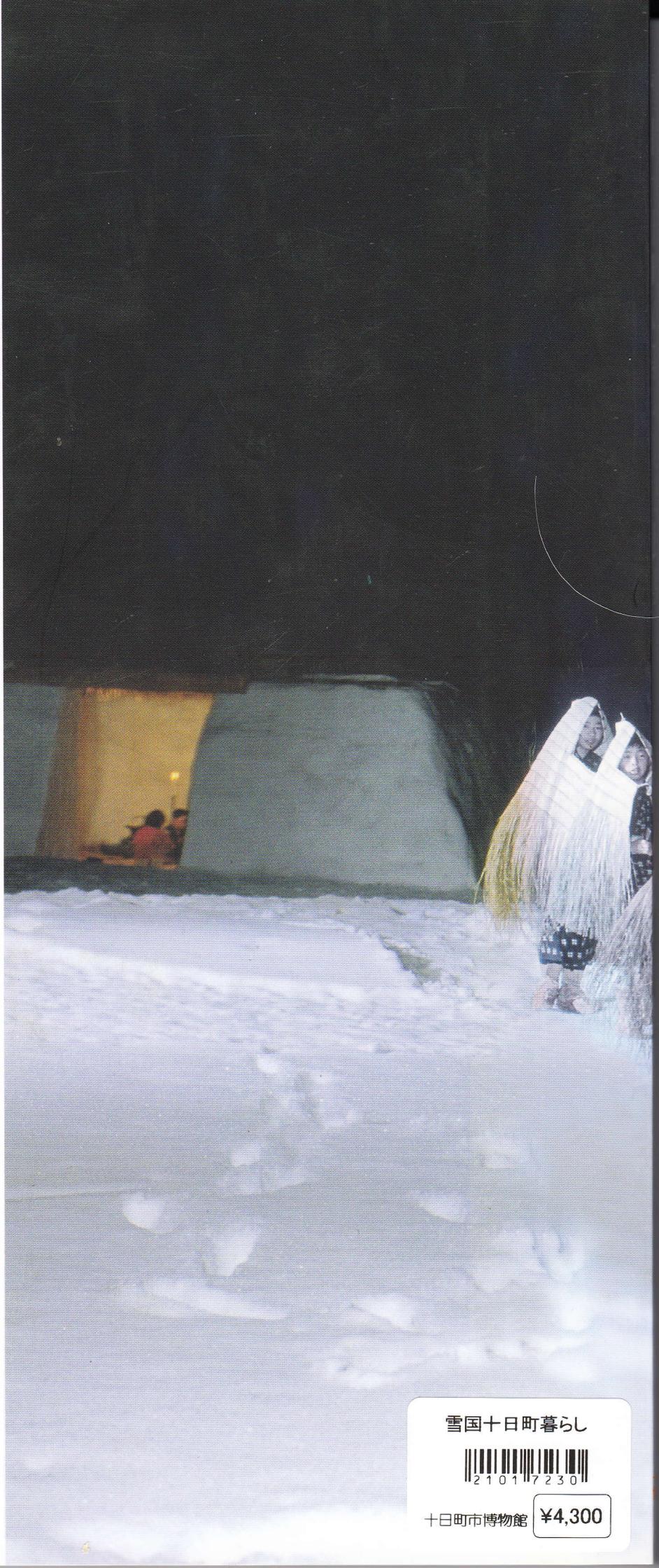


モグラモチのようす



鳥追堂(ホンヤラドウ)の中の子供たち

鳥追いのようす



雪国十日町暮らし



十日町市博物館

¥4,300



# 雪国十日町の暮らしと民具

重要有形  
民俗文化財

十日町の積雪期用具 図録

十日町市博物館

## ◻刊行にあたり◻

平成3年4月、十日町市を中心に伝承されてきた3,868点もの<sup>みんぐ</sup>民具が、重要有形民俗文化財の指定を受けました。「十日町の<sup>とおかまち</sup>積雪期用具」と題したこのコレクションは、その<sup>ほん</sup>殆どが、十日町市民をはじめ近隣町村の方々から当博物館に寄贈いただいたものであり、この大きな成果は、関係各位の理解と協力なくしては、到底果たし得るものではありませんでした。冒頭にあたり、御協力いただいた全ての皆様に対し、心より御礼申しあげます。

さて、「雪国十日町の暮らしと民具」と命名した本書は、この文化財の内容と積雪期を中心とした雪国の暮らしを、内外に広く紹介することを目的としています。編集に際しては、各項目ごとに簡潔な解説を載せ、さらに写真・イラスト・図表などを豊富に配し、若年層あるいは雪国以外の方にも、理解し易く親しみの持てる内容となるよう心掛けました。

周知の通り、本コレクションの舞台となる十日町市周辺は、世界有数の豪雪地帯です。しかし、人々は、こうした厳しい自然環境にあっても、原始から現代に至るまで住み継ぐことを止めませんでした。このコレクションが見る人の心を動かすのは、個々の民具そのものが、雪国の基層文化を物語る掛け替えのない証拠の品であるという意味からだけではなく、それら全体を眺めたとき、雪と共に生きてきた人間の姿と心を訴えかけてくるからだと考えます。時には容赦なく命までも奪い取ってしまう雪への恐れと親しみ——相反する二つの想いが、雪国の人間の心にあります。人々は雪と闘いながらも雪を受け入れ、雪に生かされ、そして無雪地では思いも及ばぬ雪との共存の方策を積み重ねてきました。

昭和61年、今回の指定に先立ち、「<sup>えちごちぢみ ぼうしよく</sup>越後縮の紡織用具及び関連資料」(2,098点)が重要有形民俗文化財の指定を受けました。その中で展開されるもの、つまり雪国の女性たちが心血を注いで生み出した技と、彼女たちの暮らしの諸相も、実はここで紹介する雪国の暮らしの重要な一頁なのです。そういう意味からもこの二つのコレクションは、血脈の通い合うものであり、互いに互いを欠いては語る事ができないものと言えるでしょう。

昨今、「<sup>こくせつ</sup>克雪」から「<sup>り</sup>利雪」「<sup>しん</sup>親雪」へと雪との係わり方の転換が唱えられていますが、その原形は既に昔からの雪国の暮らしの中に存在していました。本書を手にし、消えゆく過去の暮らしに郷愁を感じる読者も多いでしょうが、それに留まらず、本書を心豊かな雪国の暮らしを捉え直すきっかけに、そして今後の雪国を、あるいは自然と人間との係わり方を考える上での材料としていただけるなら、これに勝る喜びはありません。

冒頭に記したように、本指定は多くの方々の好意があっはじめて達成し得たものです。これも当博物館に対する理解と期待が大なるものと受けとめ、それに答えるべく今後一層の調査・研究活動に努めてまいりたいと存じます。

最後になりましたが、前回の文化財指定に引き続き、本指定に際しては全国的な視点からコレクションの体系化を御指導賜り、さらに本書の刊行にあたって、快く序文を寄せてくださいました前文化庁主任文化財調査官（現帝京大学教授）天野武先生に対し、衷心より感謝申しあげます。

十日町市博物館

# 序 文

帝京大学教授 天野 武

このたび、重要有形民俗文化財「十日町の積雪期用具」（平成3年4月指定、3,868点）に関わる図録が公刊されることとなった。まことに意義深いことである。この文化財の内容構成などの概要については、すでに周知のこと（『月刊文化財』平成3年6月号参照）とはいえ、それで充分というわけではなかったからである。

「積雪期用具」関係の国指定件数は、本物件を含めて6件を数える。雪国と称される地域が広範囲におよびかつ国土全体に占める割合の高いことを考慮すれば、上記件数をもって満足すべきではないだろう。ただ、既指定6件のコレクションにもられた用具は、各々それぞれの地域に営まれてきた生活を語る実物資料として、きわめて重要なものである。「十日町の積雪期用具」は、もちろんそうした趣旨にそう典型例の1つであり、越後妻有地方に繰りひろげられてきた積雪期の生活実態とその変遷推移を知る上で、かけがえのないものである。

重要有形民俗文化財「十日町の積雪期用具」には、越後の名産縮織りの集散地として発展してきた町場をはじめ、周辺の信濃川沿いの村々や背後に点在する平地・山手の村々を含めた十日町全域から収集した用具類が充ちている。約20年の歳月をかけ、民俗学専攻の研究者たちの協力体制を基本にし、かつ有識者の意見を取りこんでまとめられただけに、冬仕度から翌春の消雪するまでの生活の諸相をきめ細かに語るにふさわしいものとなっている。しかも、それらを全体として通観するとき、豪雪からいかにして家屋や地区の生活を防御し維持しようとしたかを語る用具類、越冬の日常生活がいかなる実態であったかを実証する用具類、積雪の特性に着目していかに利用してきたかを跡付ける用具類および長い積雪期間中に折々なされてきた年中行事などの様相を伝える用具類などに大別できよう。もちろん、具体的には、除雪用のコシキ（木鋤）・ユキドイ（雪樋）、道開け用のミチフミバン（道踏み当番表）、交通・通信用のワカンジキ（輪標）・スカリ・ゴカリ（細長く特大の道踏み用具）・タテフダ（立札）、運搬用具としての各種の櫓類が網羅されている。また、衣食住生活の実際に使われたワタコ（真綿製の背中覆い）・スッポン（藁で編んだ長沓）・ワラグツ（短

沓)・ツケモノオケ(漬物桶)・ミソオケ(味噌桶)・ヨオギ(綿入れ袖付き布団)・ネシキブイトウ(継ぎ敷布)など量質ともに重厚に収集されたものの例は枚挙にいとまがない。

それら用具類につき、この図録では適宜使っている状況写真を添え、あるいは実測図を配し、解説を付して、誰にでも分かりやすいように編まれている。しかも、それらが整然とした体系化されたなかに位置付けられているとともに、生活の変遷推移を念頭において説述されているので、現在目にすることがなくなった民俗についても、臨場感が得られるよう工夫されているのである。それにしても、親しみやすさを念頭におき、各分野の用具類を可能な限り収載しようと努めている点は好感が持てる。このように受け止めるならば、この図録は啓蒙普及の役割を十分に果たすとともに、雪国十日町に世代を重ね繰りひろげられてきた民俗文化の解明にきわめて有益なものといえよう。

かつて、鈴木牧之は『北越雪譜』を著わし、越後の雪のすさまじさと雪中における人々の生活とを郷土人らしい筆致で縦横に綴っている。雪中の生活実態を描写した名著ないし古典として、後世の人々に裨益したことは多言を要しない。郷土人による郷土観察の書物であるからである。この点に照らすとき、本書は、図録と銘打たれているものの、決して平板な図集と解すべきものではなく、『北越雪譜』と同じように雪中の生活の深層にまで迫って民俗文化の諸相を明確にしようとする意図のあるものである。その構成といい、収載されている解説文・写真といい、後の世において必ずや郷土研究に一役買うことを疑わないのである。いわば、20世紀ないし平成の時代を画した越後妻有の雪譜とでも評されるのではなからうか。これだけ内容の充実した積雪期用具関係の図録は、全国的に見わたしても他に類例がない、と確言できよう。

ともあれ、本書が先年公刊された『図録妻有の女衆と縮織り』(昭和62年)と相まって真価を一段と高められることを期待するとともに、この図録の編集刊行と文化財指定とに取り組まれてきた十日町市博物館の皆様、この快挙に物心両面の援助をされた市当局ならびに博物館の企画に賛同されて用具類を寄付し聴取り調査などに惜しみなく協力された市民の皆様に深甚の敬意を表したい。

最後に当たり、十日町市博物館の取り組まれてきた一連の事業に若干の関係が持てた機縁を無上の喜びであることを付記し、序文とする。

# 目 次

刊行にあたり	1
序 文	2
生活の舞台	7
口 絵	10
概 説	14
一年の生活暦	22
冬 の 一 日	24
凡 例	26

## 第1章 衣生活用具

27

イ 被物	29
ロ 着物類	30
①短着	30
②長着	32
③下着類	34
④袖無類	35
⑤首巻・手甲類	37
⑥子供着	38
⑦股引類	40
⑧帯・前掛類	41
⑨脛当類	42
ハ 履物	43
①外履用(藁製履物)	43
②外履用(木製履物)	46
③内履用	47
ニ 雨具・防寒具	48
①蓑類	48
②外套類	49
ホ 裁縫・洗濯用具	51
①裁縫用具	51
②洗濯用具	53
●衣生活用具品目一覧	54

## 第2章 食生活用具

55

イ 漬物仕込み用具	57
ロ 味噌仕込み用具	58
ハ 餅搗き用具	60
ニ 雪室用具	62
ホ その他食生活用具	64
①貯蔵用具	64
②調理調製用具	67
③煮炊き等用具	72
④飲食器類	74
⑤嗜好品用具	76
●食生活用具品目一覧	78

## 第3章 住生活用具

79

イ	防風雪用具	81
ロ	除雪用具	83
	①雪掘り用具	84
	②雪処理用具	87
ハ	暖房用具	89
	①イロリ(ジロ)用具	90
	②点火・火焚き用具	92
	③温石類	93
	④火鉢類	94
	⑤コタツ・アンカ類	96
	⑥寝具類	99
ニ	その他住生活用具	102
	①灯火用具	102
	②敷物・掃除用具	103
	③井戸・その他用具	104
●	住生活用具品目一覧	106

## 第4章 生産・生業用具

107

イ	脱穀調整等用具	110
	①種子物保存用具	110
	②脱穀調整用具	111
	③肥引き・灰土撒き用具	115
	④牛馬飼育用具	116
	⑤横穴開削用具	117
ロ	手仕事用具	118
	①藁等細工用具・製品	118
	②竹細工用具・製品	127
	③ワタコ等つくり用具	130
	④網つくり用具	131
ハ	春木山等用具	132
	①春木山用具	132
	②炭焼き用具	133
	③薪拾い用具	134
ニ	狩猟用具	135
ホ	諸職用具	138
	①木挽き用具	138
	②屋根葺き用具(茅屋根用)	143
	③木羽へぎ・木羽葺き用具	144
	④桶屋用具	147
	⑤付木つき用具	151
	⑥紙漉き用具	153
	⑦箕つくり用具	156
	⑧鍛冶屋等用具	159
ヘ	その他生産・生業用具	163
	①桐囲い等用具	163
	②節季市用具	164
	③冬稼ぎ用具	167
●	生産・生業用具品目一覧	168

## 第5章 交通・通信用具

169

イ	交通用具	171
	①道踏み用具	171
	②道踏み・雪上歩行用具	174
	③雪氷上歩行用具	179
	④照明等用具	180
ロ	通信用具	182
●	交通・通信用具品目一覧	184

第6章  
運搬用具  
185

イ 櫓・ロ 櫓付属用具——187  
 ①ヤマヅリ・シュラ……187 ②ヤマヅリ・シュラ関係付属用具……192  
 ③キカイヅリ・キカイヅリ等関係用具……194 ④その他の櫓……197  
 ハ その他運搬用具——198  
 ●運搬用具品目一覧——200

第7章  
社会生活用具  
201

●社会生活用具品目一覧——206

第8章  
民俗知識用具  
207

●民俗知識用具品目一覧——212

第9章  
娯楽・遊戯用具  
213

イ 娯楽用具——214  
 ロ 遊戯用具——218  
 ●娯楽・遊戯用具品目一覧——232

第10章  
信仰・儀礼用具  
233

イ 信仰用具——235  
 ①神事・仏事等用具……235 ②大正月・年神迎え用具……236  
 ③小正月行事用具……242 ④節分行事用具……248  
 ⑤初午行事用具……248 ⑥十二講行事用具……249  
 ⑦涅槃行事用具……250 ⑧天神講行事用具……250  
 ⑨節供行事用具……251 ⑩サンヨ行事用具……251  
 ⑪彼岸行事用具……252  
 ロ 儀礼用具——254  
 ①年取り行事用具……254 ②年頭行事用具……255  
 ③社交贈答用具……256  
 ●信仰・儀礼用具品目一覧——258

焼印について……259  
 収集地一覧総括表……260  
 参考文献……262  
 あとがき……263  
 協力者・関係者一覧……263

生活の舞台



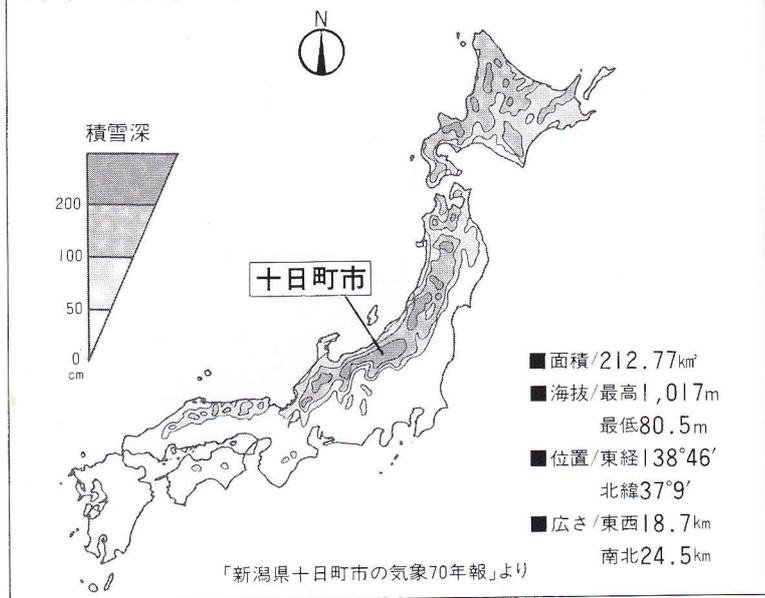
## 雪と信濃川に育まれる文化

十日町市は、長野県境に近い新潟県南端部に位置し、人口5万人規模では世界有数の豪雪都市である。

市の東側には魚沼丘陵が南魚沼郡との分水嶺をなし、西側には東頸城丘陵の山々が連なるが、長野県境と小千谷市の境附近の両端で山地が迫り、十日町市街地を中心に盆地を形成している。

この盆地を長野県境から流れ込む大河信濃川が縦断し、その両岸には雄大な河岸段丘が発達した。両岸の山系からは中小河川が信濃川へ直角方向に注ぎ込み、この段丘を区切っている。

## 日本の積雪地帯と十日町市の位置



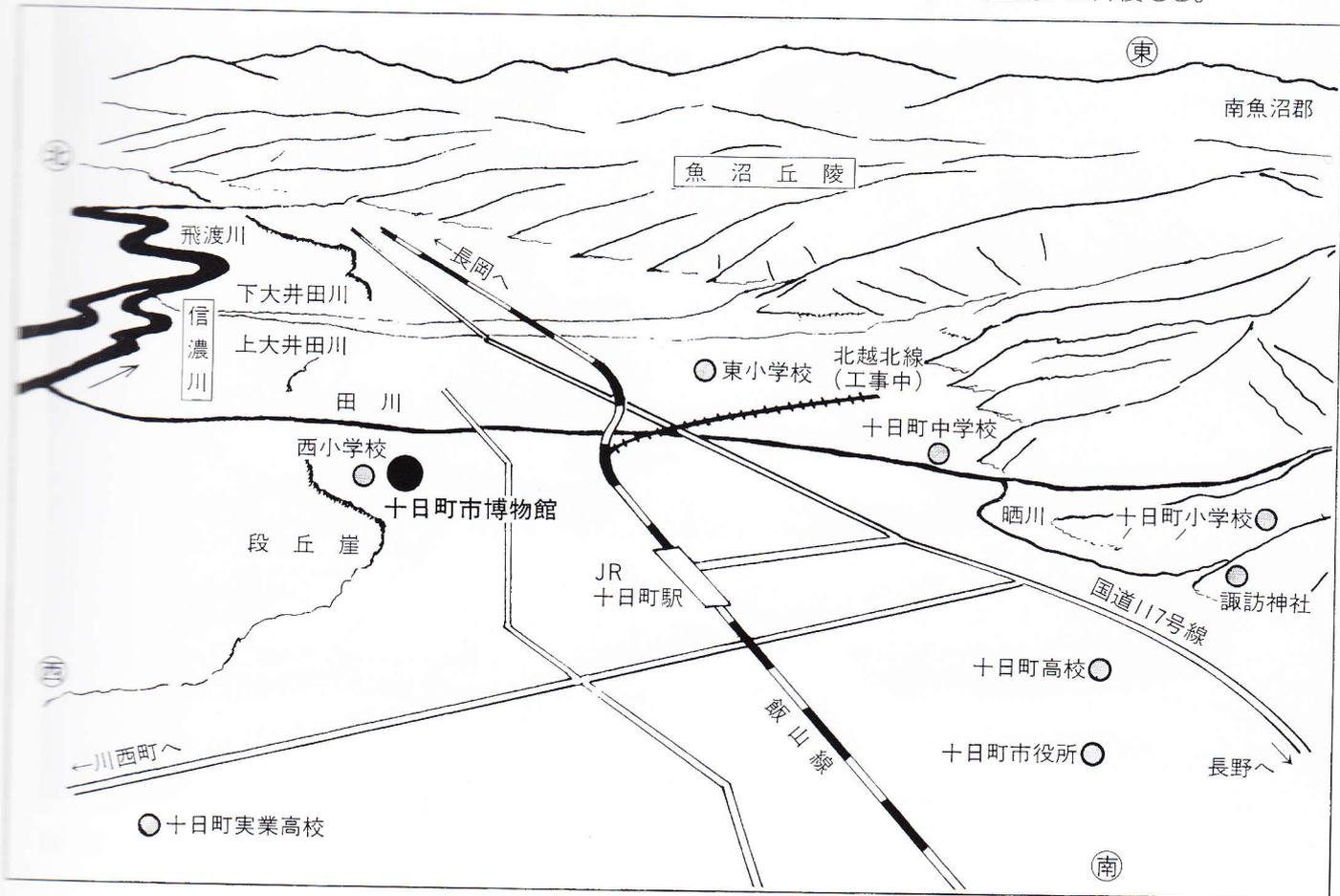
## 収集の範囲





冬の十日町市街地

冬になると、大陸から乾燥した冷たい季節風きせつふうが日本に向かって吹き、日本海を渡る際に海から立ち昇る水蒸気を多く含み雲となる。雲は三国山脈など高い山に突きあたり、上空で冷やされ雪となって山沿いに降積もる。

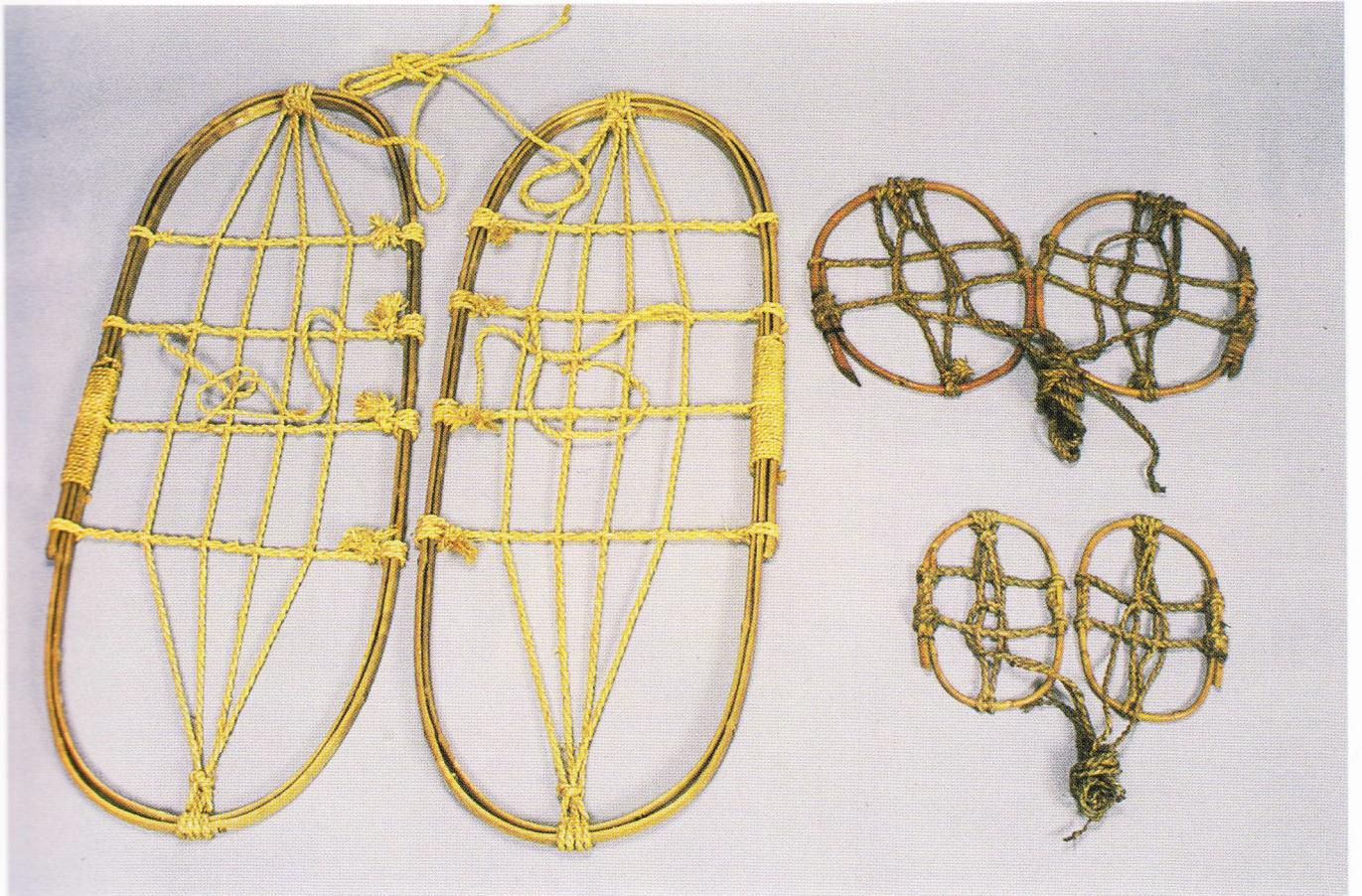




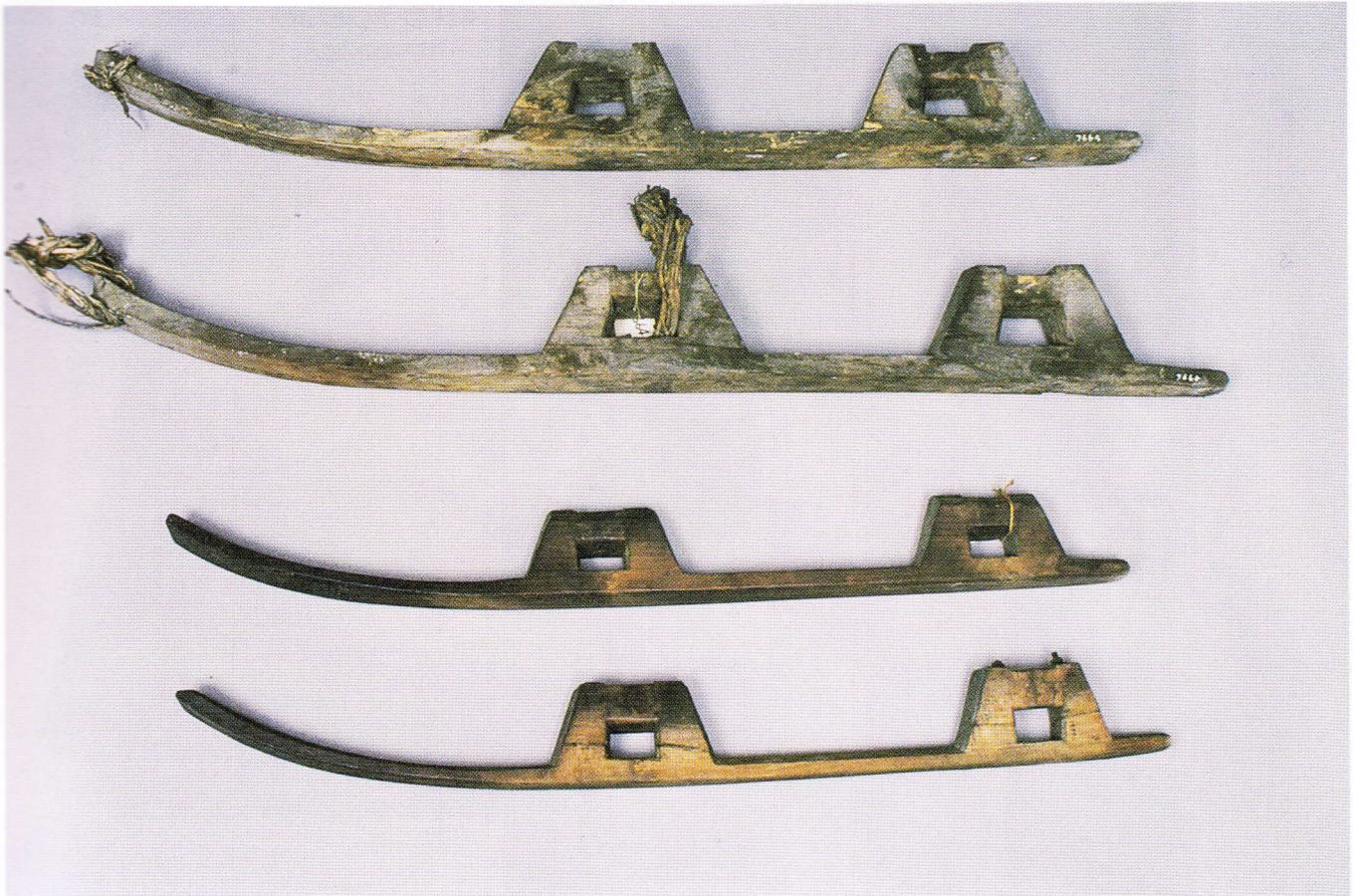
節季市のように



藁製履物（上スツポン2点・左下ワラグツ・右下スツペ）



雪上歩行・道踏み用具（左スカリ・右カンジキ2点）



運搬用具（ヤマソリ）



▲ドウラクジン焼き



◀ドウラクジン  
(市内新水地区)

▶ダイコタテ



▼箱膳に食器を収納したようす



▼冬の夕飯 (ニーツケゾーセエ・ダイコニ・コーコ・ツケナ・ニマメ)



# 概 説

## 1 はじめに

この概説は、平成3年4月19日付をもって、国の重要有形民俗文化財指定を受けた「十日町の積雪期用具」(3,868点)についてのものであるが、用具そのものについての解説は、本書中に掲げる分類区分の項、または個体図示に付随して述べることにし、ここでは、それらの用具が実際に使用された場面の背景となる雪中生活の状況を主として記しておくことにする。

これらの用具類を収集整理するにあたって配慮したことは、雪深いこの地方の暮らしの中で古くから使い続けてきたものを主としたことであって、年代的に言えば、いわゆる太平洋戦争以前のものを一つの区切りとした。しかし、戦後における社会変貌に伴って新しい機械・器具の急激な普及にもかかわらず、特に農家などにおいて、その後も使われつづけた用具も少なくなかったため、それら伝統的で古態を示すものも併せて含めることにし、おおよその下限を昭和30年代と考えた。また、直接雪にかかわる用具中に新しく導入されたと見られるものも若干含めたが、これは、それら用具の変遷を示す意味から加えたのである。

## 2 雪国十日町

十日町は雪国である。雪国という呼び方は、近年降雪地一帯に使用され、わけても新潟県は、県名そのものが直ちに雪国と見なされるほどである。しかし、新潟県内においても地域によって降雪・積雪の状態は格段に相違するのが実態なのである。

雪国という言葉は、一般的に川端康成の小説『雪国』が直ちに思い浮かぶほどに極めて情緒的で、ここに集積した用具によって語ろうとするところとは大きく異なる。そこで私たちは当地方の実情を踏まえながら「雪国」について、仮の定義づけをこころみた。以下がその要点である。

- イ、積雪期が長く、約半年にわたって大地が厚い雪に覆われる。
- ロ、降雪が間断なく続き、積雪量が極めて多い。
- ハ、一年が無雪期と積雪期に二分され、別世界が出現する。
- ニ、冬、人々は雪に埋もれた生活を余儀なくされるが、二分される生活様式に対応し、次の季節の生活準備を怠らない。
- ホ、ここに住む人たちは、雪の重圧による苦難を身をもって感じているが、それとともに、この雪に対して得体の知れない愛着をもち、それから感得できる喜びを知っている。

このように、仮に定義づけてみると十日町市域をはじめ周辺地である魚沼・頸城地方は、正に「雪国」と呼ぶにふさわしい地域であると言える。毎年、11月ごろになると初雪を見、やがてそれが根雪となって、春4月、雪消えが遅ければ5月まで残る。積雪は平年で3mを越え、大雪の年は4~5mにも及ぶ。この間、野も山も人家もその下に埋めつくされる。人々は雪と闘い、雪の重さに耐えながら暮らしを立ててきたのである。

### 3 雪中の暮らし

この地域が、いわゆる豪雪地であるということは昔も今も変りないが、昭和30年代後半ごろからの高度経済成長期を境に、生活の在り方は大きく変貌した。その理由は、機械力の導入によって、道路事情が改善されたこと、冬季にまで残った稲始末などの農作業が軽減できたこと、また、家庭生活においても石油・ガス・電力などが農家に供給されて、衣・食・住の資材が流通機構の変化などによって潤沢になったことからである。

老人たちは「昔から考えれば、夢のようだ」と言う。確かにその通りだ。しかし、考えてみると、いまの生活はすべて他律的であって、自らの力によるものは皆無に等しい。かつては、自分自身の労力によって田畑を拓き耕し、自然の草木を採って食用とし、器物をつくり出す技術を持っていた。要するに自らの力で生きてきたのである。ここに集められた用具類は、それを側面から支えたもので、当時を物語る証拠品なのである。以下、往時の生活を振り返ってみることにする。

#### イ 冬支度

秋の取入れが漸く峠を越える11月（旧暦では10月）ともなると、初旬にも初雪に見舞われることがある。この雪がそのまま根雪になることは希だが、予断は許されない。いずれにしても後を追いかけて降る雪が、地上を雪国に一変するのは必定である。

刈り残した稲や雑穀・野菜類を雪の下にしては一大事である。何よりもまずそれを取入れる。刈取った稲も雪降り前には脱穀まで手が回らない。庭先などに「稲ニオ」に積んでおいて、雪が降込んでから家に運び入れて作業することになる。

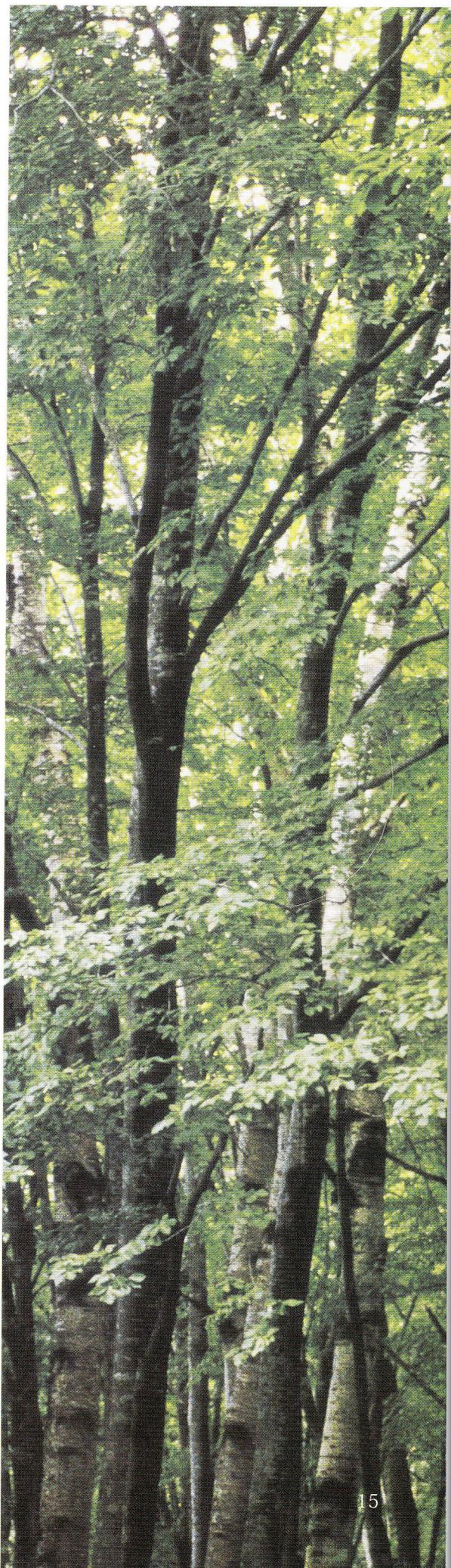
雪はもう何時降るか知れない。その雪への備えを固めておかななくてはならない。雪中での暮らしの準備も万全を期さねばならない。冬支度は雪降りまでが勝負である。雑多な仕事を同時進行で進める。雪降り前は最もあわただしい時である。

(1) 雪囲い——雪害から家屋や樹木などを守るため、木竿や茅などを用いて支柱を立て、覆いを施す。家の戸口もすべて囲うが、玄関先には、雪棚ゆきだまといって仮設の出口を付設する。家屋内もまた同様で、土間住いでは藁わらの下の藁を敷き替え、藁を束ねて土台下を塞ぎ、戸障子も目張りをして隙間風を防ぐ備えをし、塞いであった掘り炬燵くわんすも使えるように準備しておく。

(2) 食料の確保——一切のものが雪に埋めつくされる冬を凌ぐために食料の貯蔵保存は不可欠な冬支度であるが、それらを腐食や鼠害、凍結から守ることに工夫をこらす。野菜類などは、貯蔵を兼ねて漬物・乾燥物などしておくものもある。

(3) 薪炭の用意——穴居生活を思わせる雪中民家の暮らしには、暖房・採光、さらには食物の調理・煮炊きの燃料は、一日として欠くことができない。薪の手配は春から用意したが、伐採する山を持たない家では、薪拾いやガス（流木）拾いなどして集めた。こうして積んでおいたものを家に運び入れる。

(4) 衣類の準備——冬の衣料は、防寒のための着衣と、戸外で用いる雪中の履物及び外被に大別できる。着物は、重着かさねぎして着ぶくれ





ることもあるが、綿入など冬専用の着物も用い、さらにワタコやカメノコなどの背中当て保温を補った。履物は、藁沓の類各種のものを専ら自製して用いた。外被の類も藁・菅等を素材に自製したものが主流だったが、近年になるとケット・マントなどが出回って利用されるようになった。

家族のそれぞれに合せて、これらのものを点検しておかなくてはならない。着物類はすべて主婦たちの仕事であり、子供の成長に合わせての補修などで夜遅くまでそれにかかった。

(5) 雪処理用具の点検——雪囲いや家屋の防備態勢が一段落すると、いよいよこれから到来する冬將軍を迎え撃つための準備をしておくことになる。とはいっても、雪との闘いは専ら守勢が基本だから、降積む雪の処理用具が唯一の武器である。たとえばそれは、コシキやカンジキなどで、そうしたものを取出して点検し、すぐにも使えるようにしておくのである。

(6) 冬支度の段取り——「冬ごもり」という言葉があるが、雪国の人々、殊に農家の人たちは冬期間を慢然<sup>ちつぷよ</sup>として春を待つだけでは済まされない。まず農作業の後始末があり、また、きたるべき春からの田畑仕事に備えての準備、さらに余暇を見出して副業としての換金物資の生産にもはげむ。こうした仕事を円滑に進めるために、器材の確保・保存・工具類の見つくり・作業の段取り等も講じておかなくてはならない。中でも、紙漉き・縮織りなどは、その顕著な例といえる。

(7) 正月の支度——この時期はまた、年間最大の行事である正月を目前に控えた時でもある。煤掃きをし、門松を迎え、注連縄も作る。年取り・正月の料理もすべて手作りだったから、主婦達はそれにかかりきりになる。正月に引き続いてある諸行事や、それに付随する祭事儀礼・交際などにも気配りが必要であった。

正月は重要な儀礼行事であったから特別な料理材料を必要としたし、多少の衣料なども買い整えなくてはならない。いわゆる「正月買いもん」である。十日町市街地では、古くから12月（旧暦）に開設される市を「節季市」と呼び、それらを調達する場としていた。新暦が使われるようになると、この市は1月に開設されるようになった。この市は、近郊の農家が自家で作った藁細工・竹細工や野菜類などを持ち寄って販売したもので、農家の人たちはここでの売上げ金を町での買い物の代金にあてたのである。したがって生産農家では、数日開かれるこの市日を目標に販売品の調整に忙しく追われる時期であった。

## ロ 雪とのたたかい

連日降り続き積もる雪の処理作業は、正に雪との闘いである。しかし、それは常に受身の闘いで忍苦の連続であった。

(1) 道踏み——雪の降積もった朝は、よほどの小雪でない限り道踏みをしなくてはならない。道踏みというのは、足にカンジキを着けて、積もった雪を念入りに踏み固めて道をつけることで、こうして道路歩行を確保しないと雪国の社会生活は停止してしまうのである。雪の降った朝、各家々から道が踏み出され、やがてそれぞれの道がつながることによってムラの鼓動がはじまる。雪道はムラの血管なのである。

(2) 雪掘り——屋根に降積んだ雪を除く作業、いわゆる「雪おろ

し」を当地では「雪掘り」と言いならわしている。人の背丈を越える積雪をコシキで一掬いずつ切取って投げおろす。

雪の重さは、新雪で1㎡当り30kg、それが高く積もり、日が経って固く締まると重さが増して350～550kgにも及ぶ。したがって、これを放置すれば屋根の損傷はまぬがれないし、家の倒壊にもつながりかねないのである。

雪掘りは重労働であるが、さらにこの作業の辛苦さは、屋根の雪おろしだけでは済まないことである。投げ落とした雪が軒端に高く積み上がって屋根の高さを越え、家の戸口をすべてふさいでしまう。この雪を除去しないと次の雪をおろすことができないし、家からの出入りも不能になるのである。

雪掘りの回数は、平年で一冬に4～5回、大雪の年は10回にも及び、1回の作業に家族総出で数日も要する。このような状態になると、家の生業が圧迫されるどころ多である。

## ハ 日常のくらし

(1) 家ごとの暮らし——雪国の冬は、深い雪で屋内と屋外がきびしく区切られる。殊に1～2月の降雪の最盛期には家族みんなが家にこもり、身を寄せ合って過ごす。しかし、男たちには道踏み・雪掘りがあり、子供たちは通学があるが、それは止むを得ぬ必要から、屋内に居るのが通常である。そうした点から見ると、夏場の住居利用と冬のそれとは対照的であった。

家族たちは、イロリの火を囲んで暖をとり、その火の明りで仕事をした。主婦たちのする調理も、その煮炊きにもこの火が使われ、食事もまたこの周りです。女たちの被服の繕いも育児も、子供たちの遊びもここが基点であった。イロリはまた、来客を迎えて接待する社交の場ともなり、家の暮らしの中心として、雪国の冬には特に重要な場所であった。

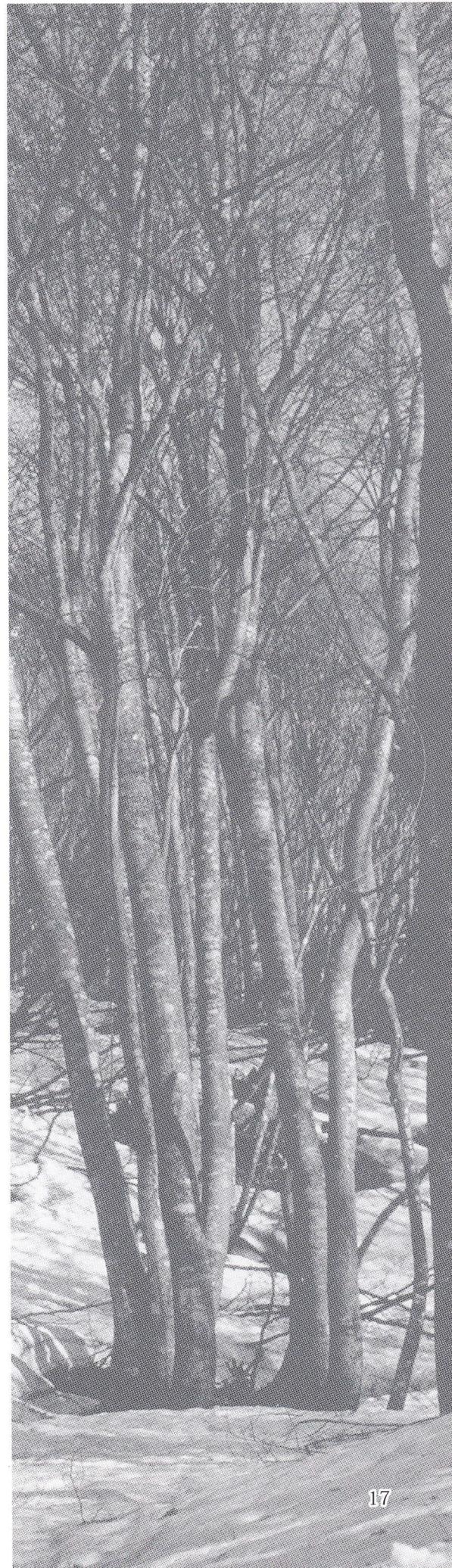
やがて、そこから火を分けて火鉢や炬燵などが使われ、灯火もまた専用器具が用いられるようになって、その機能は分化されるが、火の神の司るイロリは、家生活の拠点であり続けた。

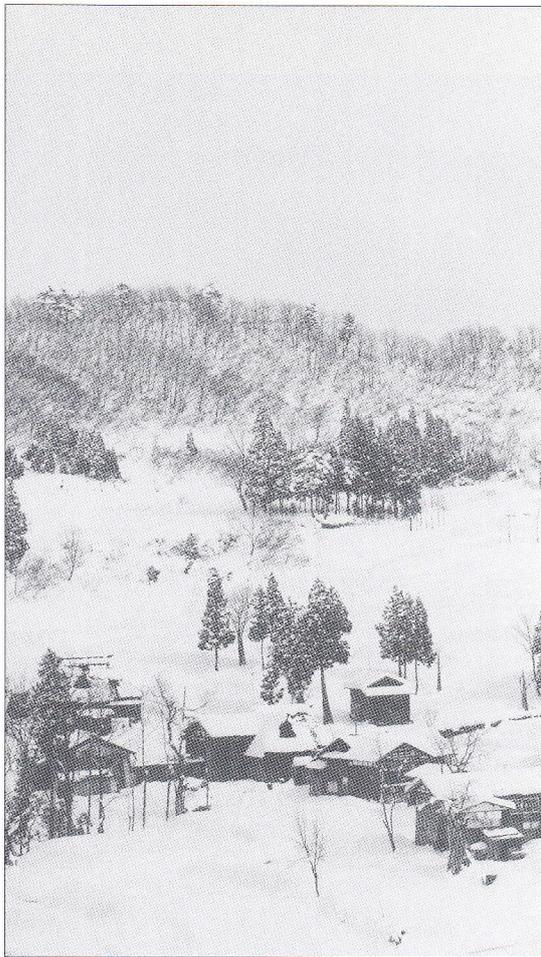
(2) 社会生活の維持——前記の朝の道踏みの例でも知られるように雪国の冬は、個々の日常生活自体がムラの暮らしと深くかかわっていた。それとは別に公共的施設の維持管理、たとえば堂・宮・集会所・学校等の雪囲い・雪掘り、また、そうした施設や隣村との間をつなぐ道つけ（道踏み）なども共同の仕事として、輪番を定めてお互いが労力を提供して行なったのである。

雪中に突如として起る災害、たとえば火災・雪害・急患の発生など、非日常的な事態に対してもムラ人たちの助力が是非とも必要であった。殊に火災に際しては近隣の村々の応援を必要としたので、日ごろからの村付合いにも配慮した。村々には消防組が組織され、冬への準備として消防ポンプの車輪を橇に付けかえ、消火用水の点検、雪囲いを施すなど雪国特有の配慮がなされ、そのための作業もムラの仕事として怠らなかった。

## 4 冬仕事

冬仕事という言葉で総称される雪国の積雪期の仕事は、実にさまざまである。これまで述べてきたように家事と言われる仕事や雪中の生活を維持するための作業があり、公共的なムラ手間及び相互扶





助的な作業に労力と日時を費やすことが多大であった。それがムラの生活では通常なことであったが、それらはすべて直接的には無償が原則であって、有償つまり現金収入を得るための仕事は、その余剰労力に依ったのである。

## イ 雪中の副業

ここで取上げる冬季の仕事は、主として現金収入を得ることを目的とした、いわば副業的な作業であるが、それとて判然と無償と直接的有償とを区分しがたい部分を含んでいる。それは農家の冬仕事は、生業である農業の補的なものであり、家で必要とする生活物資の調達であったからで、副業としての生産物もその仕事の延長と見られるものが多かったからである。

たとえば、藁細工や竹細工を中心とした手仕事にしても、その製作技術によって他人の需要に応じる物を作り、さらに公的な奨励や指導などによって副業として成り立つ場合が多かった。

これとは別に特別な技術を身につけた、いわゆる職人の仕事があるが、これらにしても農業のかたわら兼業的に農閑期の仕事として行う人も少なくなかった。また、こうした仕事では季節的に気象条件がその作業に適していたり、相手方の需要がこの時季に集中する、といった事情とも関係していた。

いずれにしても生業である農作業から切り離されて、非生産的な仕事に限られてしまうこの時季に少しでも余暇を見出して現金収入の道を講じるべく努めたのである。そうした意味から、家に人手が揃い日常的な仕事に支障がない人たちは、直接労力を提供して賃金を得る人もあり、また、いわゆる出稼ぎとして家を離れる人もあった。しかし、かつての出稼ぎは、「口すぎ（口減らし）」といった意味もあり、また、若者たちの場合は一種の人生修業または通過儀礼的なこととしても考えられていた。その点では、その後の紡績女工や現在の出稼ぎとは同系の事柄でありながら異質な要素が含まれていたのがあった。

## ロ 節季市と縮織り

雪中の生産生業は、上記のように多様だが、それと深くかかわっていた「節季市」と「縮織り」について若干の補足しておくことにする。

(1) 節季市——節季市のことは「冬支度」の項でも触れたが、この市は出費の多い時期の唯一の現金収入の場であり、各農家とも販売物の製作にはげんだ。手仕事による品物が自家用の域を越えて交易品となり、町場の需要に応じた。そのため、小規模ながら地域ごとにその品目の特産地を形成するほどであった。

(2) 縮織り——当地方一帯は、かつて天下の名品といわれた「越後縮」・「越後上布」の一大特産地であった。毎年、冬季ともなれば家ごとに女性たちは、苧麻（カラムシ）の繊維によって「苧績み（糸づくり）」をし、イザリバタ（地機）を立てて「機織り」にはげんだ。極めて辛苦の多い仕事で、一冬1人1反が標準的な生産量であったが、これが明治時代ころまでは農家唯一の現金収入の道であったので、雪国の女たちは忙しい家事の合い間をさいてこの仕事に取組んだ。十日町が織物産地として発展する基盤は、これによるところが大きいのである。

「雪ありて縮あり…」(『北越雪譜』)と言われるように、雪と直接深くかかわり、当地方の気候風土に適した縮織りは、忍苦に耐える雪国の女たちの力と相まって当地の副業中の白眉であることは万人の認めるところである。これについてはすでに昭和61年「越後縮の紡織用具及び関連資料」(2,098点)として、国の重要有形民俗文化財指定を受けているため、今回は除外した。

## 5 雪期を凌ぐ

セッキという言葉は、節季市の例にも見られるように、本来は季節の終り・年末を意味するが、豪雪の当地方では、この言葉を「雪期」または「雪季」と理解し、積雪期そのものを言いあらわす場合が一般であり、無雪期と呼び分けている。

さて、その長い雪期をどう凌ぐか、これが古くからこの地に住み継いできた人たちの命題であった。これまで述べてきた事柄もすべてそれにつながるわけだが、ここでは、雪国に特徴的と思われる事例の若干を加えておくことにする。

### イ 交通と通信

(1) 道しるべ——雪道は、強い吹雪や大雪のためにかき消されて、その所在も認められなくなることがしばしばある。そうした時、道筋に添って、あるいは曲り角となる所に竿などを突き立てて位置を示す目印とした。これは、通行人が互いに後を歩く人のための心づかいからであった。

(2) 雪中避難小屋——吹雪・降雪・雪崩などのために進退不能となることが予想される地形の箇所にも、一時的に待避できるように設けるのが避難小屋で、若干の薪なども備えておいた。

(3) 雪道の明り——暗い夜の雪道に欠かせないのは灯火具である。一面に白い雪、道の高低も分からず、それが新雪の降る夜であれば道の位置も判別できない。明りは必携品だが時として途中で日が暮れて難渋することがある。殊にそれが山越えの道ともなると進退極まる。そうした時のために峠近くの家では予め松明たいまつを作って用意しておき、分け与えたものであった。

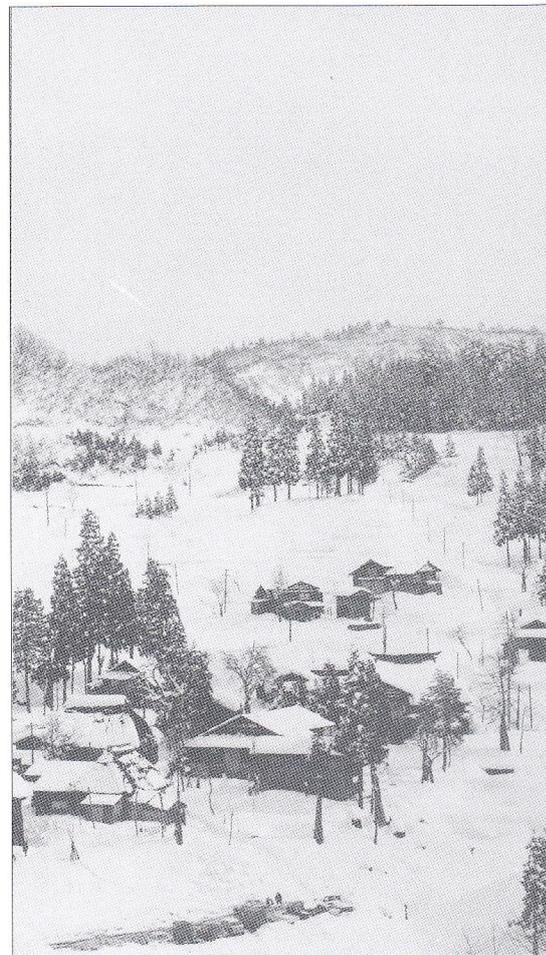
(4) 鉄道除雪組合——この地を走る唯一の鉄道、飯山線は、積雪のため運行不能になることが多く、時には長期にわたって運休することもあった。こうした事態に備えて、沿線市町村の協力のもとに鉄道除雪組合を結成して、緊急時の除雪出動に備えた。

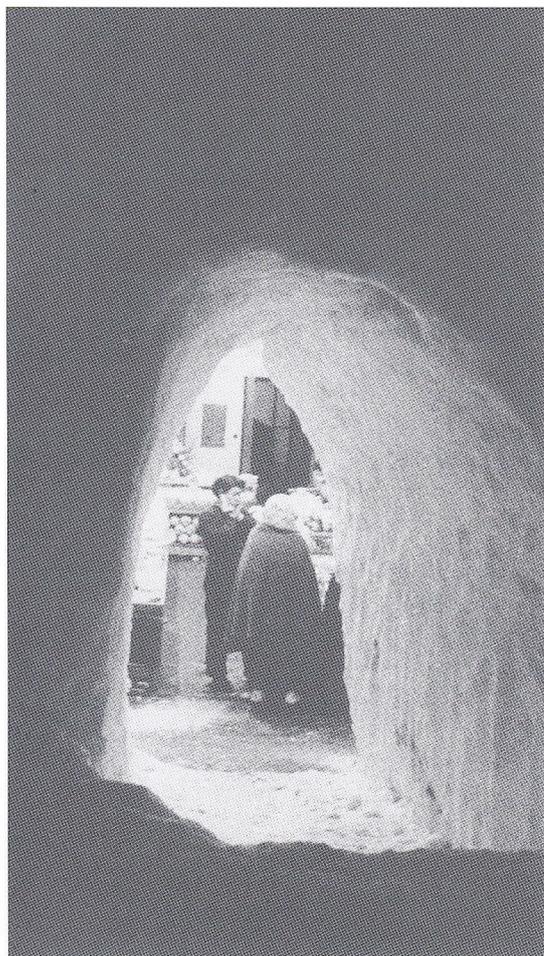
(5) 雪中伝言板——深い雪の中で、ムラ人たちに一斉に合図を送るには、板木・ホラ貝・半鐘・サイレン等の音響利用によるが多かったが、個々の家への伝達は雪道を歩いて家を訪れるほかなかつた。電話の各戸普及は極めて最近のことである。

これとは別に道行く人に伝える工夫をしたのが伝言板で、この要旨を記した紙片や木切れを手ごろな棒や除雪用のコシキなどに取付けて門口近くの道端に立てておいた。

(6) 郵便通送隊——戸ごとの郵便物は配達人が配送するが、遠い配達局などに送達する場合の手段として編成されていたのが郵便通送隊であった。重い荷を背負って、道無き山谷の深い雪を踏み分けながら、危険を冒しての輸送であった。

### 口 櫓





(1) ヤマヅリ——雪中での運搬も基本的には背負い・携行などの人体輸送だが、特別な重量物には橇を用いた。橇は雪の特性を活用した滑行運搬具で、数少ない雪利用用具の中でも最もすぐれたものだったので、古くから広く使用されていた。

当地方の橇は、いわゆる二本橇で、2本の滑り台木を足として横木で結束、組立てて使うが、この形式の橇を当地ではヤマヅリ（山橇）と総称している。ヤマヅリは主として、雪原に仮設の橇道をつけて、山で伐り出した材木・薪・また堆肥などの運搬に用いたが、無雪期では通行不能な地形でも重量物を軽く引くことができる。

(2) シュラ——特別大型に作られたヤマヅリ的一种で、シュラまたはダイモチヅリとも呼ぶ。寺院の建材や石材など、超重量物の搬送に用い、大勢の人の力で引く。この時の橇引き歌がある。

(3) キカイヅリ——二本橇的一种だが荷台が滑り台木に固定しており、橇幅は狭く、折畳み式の引手がつき、滑走面には鉄板が張られている。当地では大正年代になって普及したが、雪の積もった歩道や堅い雪面を引くのに適していることから、日常的によく用いられ、消防ポンプ用・客橇などにも改良使用された。

## ハ 冬季分校

雪中、遠い学校に通学する児童たちの苦労は大変なもので、降雪や吹雪の日には道路の判別もできなくなり、雪崩の危険にもさらされる。親たちの心労もまたひとかたではない。こうした事情から設置されたのが冬季分校である。児童数も少なかったから、当時は民家の一室を借りて教室とすることも多かった。

## ニ 民間医療

雪中の暮らして最も気がかりなことは病気であった。特別の急患や怪我人などが発生した場合、ムラ人の手を借りて病院へ運ぶとか医師に往診してもらうこともあるが、それはよくよくの事態で、大方の時は薬屋の配置薬に頼るか、古くからの民間療法によって時をしのいで快方を待つのが常であった。

きびしい寒風・雪・焚火の煙などが原因して、特に多いのが眼疾であった。春近い3月ころになると戸外に出ることが多く、日差しも強くなって、いわゆるユキメ（雪眼—結膜炎）に悩む人が多くなる。また、雪遊びの子供たちのユキヤケ（しもやけ）や水仕事の多い主婦たちのヒビやアカギレなども人々を苦しめた。こうした疾患を防いだり、痛みを軽くするために古くから伝えられた予防用具や治療法が用いられ、時には、お呪いの<sup>まじな</sup>的なことも行われた。

## ホ 雪室

雪の冷たさで食品などを保存することは、冬季にもあったが、ここで紹介する「雪室」は、雪そのものを夏まで貯蔵する仮の施設で、夏場にこの雪を取出して鮮魚などの冷蔵に用いた。雪室にはまた、蚕種<sup>ふか</sup>の孵化を調整するためのものもあった。

## 6 雪中の楽しみ

総じて言えば雪国の冬は暗く陰湿である。その長い冬を過ごすためには、生活の内面を支える楽しみや遊びの部分を見捨てることはできない。それらをまず大人と子供に分けてみると、大人の場合は楽しみと言



うにふさわしく、子供は遊びが主流であった。

大人のそれは日常の暮らしの中に余暇を見出し、あるいはそれに  
組込んでいくのが通常で、社交・儀礼とも深くつながっていた。た  
とえば茶話の雑談などであり、飲食を伴えば上等な部類であって、  
個人的な趣味・娯楽や仲間同士の遊戯などは極めて限られていた。

それにひきかえて子供たちは、遊び自体が彼等の生活行動そのも  
ので、そのことは、この項目に含まれる娯楽・遊戯用具の大半が子  
供たちのものであることから知られる。この遊びを場所的に見る  
と屋内と屋外に分かれるが、屋内での遊びは主として雪に降込めら  
れた悪天候の日が多い。一面銀色に輝く雪晴れの日ともなれば、雪  
国の中に別世界が展開されるので、誰もが家から出て遊ぶ。戸外で  
の遊びは、すべて雪にかかわることになるので、雪国ならではの遊  
びに集中される。

これを性別で見れば、女兒は屋内、男児は屋外が多いという比率  
になるが、これは、子供の遊びが大人たちの分担する仕事と深く関  
連しているからで、子供は遊びを通じて生活技術を修得することを  
あらわしているものといえる。

男女児ともに屋内の遊びに集中するのは正月行事中であるが、そ  
れは、大人たちにとっても特別な日であり、一緒に楽しむことが容  
認されたからで、この時ばかりは彼等も羽を伸ばせるわけである。  
子供たちはまた、正月（小正月）の儀礼行事において特別の役割を  
分担した。特に男児は、その主役を勤める場面もあったが、子供た  
ちは、それらも遊びの一環として取入れていた。

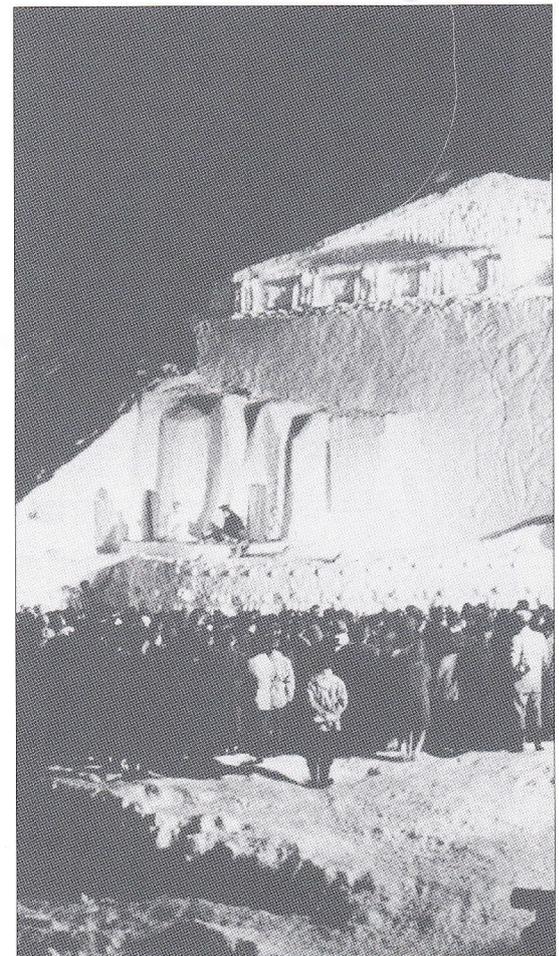
## 7 信仰と儀礼

正月は年間を通じた行事の中で最も重要視される。人々は、正月  
を迎えるために早くから準備し、精進潔斎<sup>しょうじんけつさい</sup>して年神を迎えるが、こ  
の時季は地表一面が雪に覆われ、雪国に切替わる時でもある。した  
がって、この地の人々は、雪と切離しての正月は納得しがたいほど  
の心情を持っているのである。

正月は、大正月と小正月に分けて行われ、その後にも引き続いて  
月ごとの行事がある。行事の中心は、その信仰・儀礼にかかわる祭神  
の祭事であることはもちろんだが、それと深く関連しながら人々は、  
お互いに儀礼を交わすことに大きな意味を感じていた。信仰と儀礼、  
加えて雪の描き出す舞台は、ムラ人たちの絆を強くし、人々の生命  
を再生する貴重な機会であった。

## 8 おわりに

以上、十日町市を中心に、雪国の冬の暮らしについて概観してき  
た。人々は白一色の世界でお互いの生活を守り、生業にはげんでき  
た。ここに紹介する用具類は、その生活舞台での大道具・小道具で  
あり、そのことの証拠品である。これらの物を通じて、雪国の人た  
ちの暮らしの工夫と知恵、形とするための技術、またそれらの支え  
となった信仰・楽しみ・愛憎の交錯する心情を、その背景となる雪  
と併せて推察願えれば幸いである。

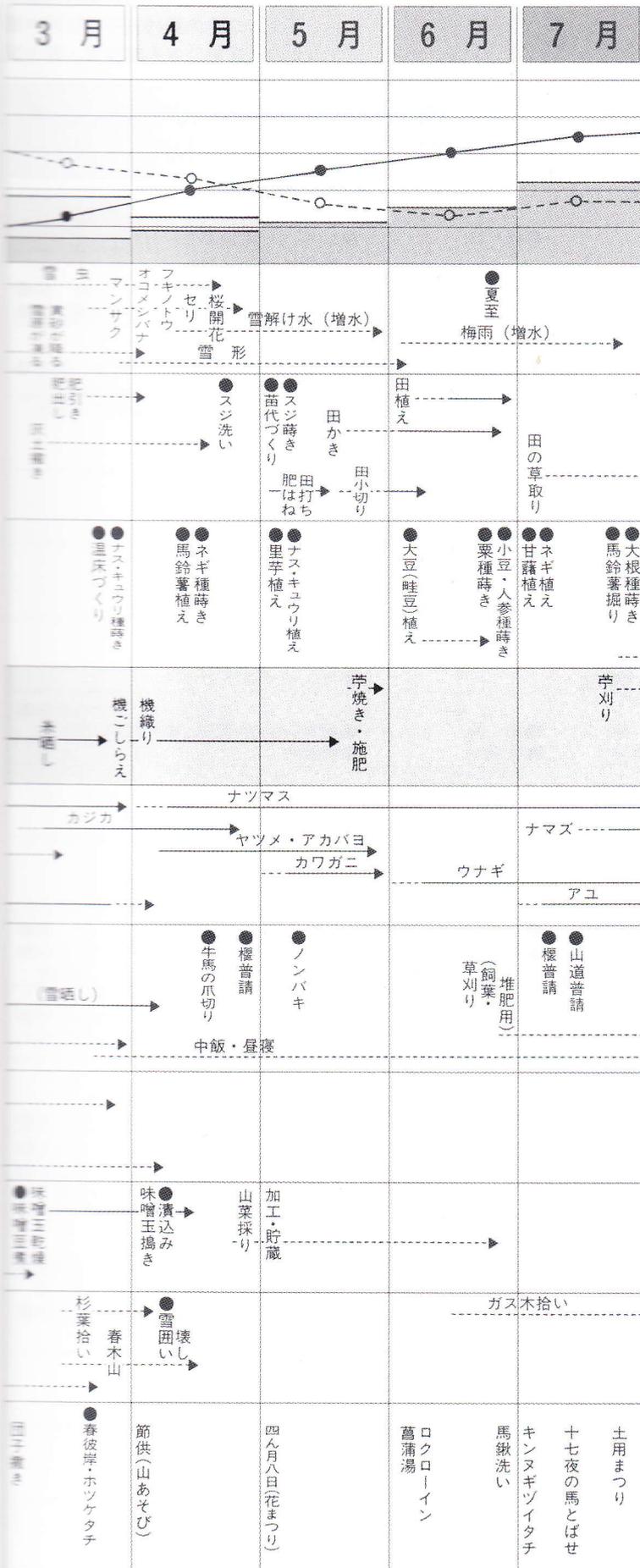


# 一年の生活暦

■設定：昭和初年ころの農村（平場）の暮らしを想定した。農作業その他は若井八郎右衛門家（市内太子堂）の

		8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
気候	降水量	400cm	300	200	100	0		
	平均気温	30℃	20	10	0	-10		
	湿度	90%	80	70	60			
	気温	気温						
自然	現象	猛暑	台風(増水) 二百十日		紅葉	雪おろし(雷) ミソレ・初雪	冬至	小寒 大寒 大雪
	田		稲架準備 稲刈り	稲架干し 稲扱き	ニオ積み 米搾り	ニオ入れ 年貢送り		
畑	作付	白菜種蒔き ナス・キュウリ収穫	ソバ種蒔き カブナ種蒔き (野沢菜) カブナ種蒔き	白菜収穫 三月菜種蒔き	粟収穫 大豆収穫	ソバ 里芋 カブナ 大根 人参 収穫		
	機	※この欄は、縮織り消滅前の明治時代の様子。 芋刈り 皮剥き 乾燥			米こしらえ 芋績み 燃りかけ			
川・漁	川	ナツマス	ナマス		サケ	フユマス		
	漁	ウナギ アユ		カワガニ				ハヨ・オイカワ(雪責め漁) 野兎猟(ベエ・ワダヲ)
日常生活	衣生活	草刈り(飼葉・堆肥用)	中飯・昼寝		馬ぶせ	秋どまり 江戸逃げ	勘定精算 ノンバキ 藁仕事	節季市
	食生活			加工貯蔵 キノコ・山菜採り	ツケナ洗い・漬込み ココロ漬込み カテのユゼコミ 大根タテ作り	納豆寝せ		米搗き(セツキ)
	住生活	ガス木拾い	ココロ割り・積み		雪囲い タキモン入れ	雪掘り		
年中行事		盆・盆踊り ボンボチツイイタチ 諏訪祭り	秋彼岸・ホツケタチ 十五夜 風祭り	九日 十三夜	十日ん夜 エビス講	餅取り 餅搗き 煤はき・松迎え 秋こと・流しこと	節分・初午 十二講 コト始め	

農作業暦を参考とした。ただし、機は欄は、明治時代の様子である。なお、昭和初年ころは、主に高機で絹織が織られていた。



## 雪国の一年

雪国では、一年を「雪季」と「夏場」に分けて考える。夏場(無雪期)は、大地に足をおろして耕し、自然の恩恵を享受してその恵物を貯えて生活を確保する重要な期間だから、長い冬ごもり中も、この時期のための準備をし続けたのである。

4月、野山もムラも埋めつくしていた雪が消えて、黒い地面が現れはじめる。この土の上で、草木が芽吹き育って花開き、やがて実を結ぶ。人々は、この稔りの豊かならんことを念じながら、時には雪を割って、作物の種子を蒔き苗を育てる。中でも稲作にける執念は格別で、苗代に種子をおろすと、その苗を植える水田を耕す。5月はその準備期で、田植えは6月であった。

田植えは、春耕の中でも最も重要な作業だが、それは神事もいふべき営みであった。この時期になると、子供たちは一斉に大地の春のめざめを追って、地上の遊びを展開する。女性たちは、雪の消え間に出る山菜に心おどらせて、しばらくその採取にふけるが、やがて農耕の忙しさに巻き込まれる。田植えが済むと田の草取り、畑仕事、そして、養蚕に日夜追われるようになる。

7月は夏の盛り、作物の成育も最もさかんな時期だが、雑草もまたそれに同じだ。蚊やブヨに悩まされながら草取りに追われる。若い衆たちは馬を引いて草刈りにはげむ。来年のための堆肥をつくるのだ。この時期はまた菅やガマなど自然の有用植物の採取適期でもある。越後縮の原料のカラムシも、この土用が採取の時期であった。

8月はお盆の月、祖先の霊を迎えて家の来し方行く末を思う時であり、正月とともに一年を二分した重要な節目でもある。このころから各村々の鎮守の祭礼が賑やかに行われる。若者たちは、盆踊りや夜遊びにはげみ、青春を謳歌するときだ。

9月から10月、いよいよ稔りの秋、収穫の秋である。稲架をかけ、稲刈りとなる。猫の手も借りた時だから子供たちも働き手とされ、学校でも農繁期休暇を設けていた。稲ばかりではない。大根も芋類も大豆も小豆もソバも粟も漬菜もあれもこれもだ。それも取入れだけでなく、長い雪中生活を凌ぐために貯えねばならない。

10月末になると遠山が雪をかぶり、冬の到来を告げる。なにはともあれ夏場の仕事はこれで結着、雪への備えに手をつける。若者たちは流しごとの相談をし、江戸行きの手筈を企てる。こうして冬の生活暦に入るが、それは本文にゆずる。

雪国の一年は、大きく二分した別世界の様相を呈するが、その内面では相互に深くかわり、一貫した体系で暦はめくられているのである。

# 冬 の 一 日 ある農家の暮らし

■設定：明治時代末～大正時代初め  
 ころの農村（平場）の中層  
 農家。8人家族で、馬1頭、

長女との続柄 (年齢)	祖 父 (60才)	父 (34才)	父の弟 (19才)	祖 母 (56才)	母 (29才)
時間 午前5時		●起床		●起床	●起床、ジロの火の焚きつけ、 湯沸し、アンボこね、 カテメンづくり
6	●起床 ●神棚・仏壇 のお参り	●家の前の 道踏み ●道踏み当番	●起床 ●馬に飼葉を やる	●神棚・仏壇のお 参り	
7	●朝 飯 ●藁すくり	●朝 飯 ●雪掘り	●朝 飯 ●雪掘り	●アンボを焼く ●朝 飯 ●苧績み	●授乳しながら、朝飯 ●朝飯の後片付け
8					●洗濯、洗濯物を外に干す
9					●機織り
10					
11			●馬に飼葉を やる		●カテメンのユヅケづくり
午後12時	●昼 飯 ●藁叩き	●昼 飯 ●雪掘り	●昼 飯 ●雪掘り	●昼 飯 ●苧績み (子守りをしながら)	●授乳しながら昼飯、後片付け ●機織り
1					
2		●雪片付け	●雪片付け		
3				●洗濯物のとり込み ●苧績み	
4					
5	●夕 飯	●夕 飯	●夕 飯	●夕 飯	●ニーツケゾーセエづくり ●授乳しながら夕飯、後片付け ●ツッコト
6	●ハツバキ編み	●ワラジづくり	●近所の人に 藁仕事に出 かける	●撚り掛け	
7	※			●子供たちに昔話を 語る	●次女を寝かしつける ●イスス挽き
8	●ジロの火で体 をよく暖める			●ジロの火で体をよく 暖める	
9	●就 寝	●就 寝	●就 寝	●就 寝	●ジロの火の始末 ●就 寝
10	※週に1～2度くらい、家族全員で近所に貰い風呂に行く				
11					

代初め  
の中層  
馬1頭

家畜1匹、兎数羽飼っている。前  
日の雪も降りやみ、良く晴れた2月  
ころの1日の様子を想定した。

本人(長女) (9才)	弟(長男) (8才)	妹(次女) (1才3ヶ月)
●起床 ●毛に餌をやる	●起床 ●家の周りの道 踏みの手伝い ●朝飯、登校	●授乳 ●長女におぶ われて学校へ
●朝飯、登校 (次女をおぶって、 学校で子守り)		
●昼あがり (家で昼飯を 食べ、次女を ツグラに入れ 再び学校へ)	●昼飯 (家から持参 したアンボ)	●ツグラに入 られる
●帰宅 ●友だちと外で 雪遊び(次女を おぶいながら) ●芋練みの練習 (子守りをしながら)	●帰宅 ●友だちと外で 雪遊び ●ランプのホヤ 磨き ●馬に飼葉を やる	
●夕飯 ●毛に餌をやる ●ポポワイサ (子守りをしながら)	●夕飯 ●縄ない	●授乳 ●ツグラに入れ られる
●祖母に昔話を 語ってもらう ●就寝	●祖母に昔話 を語ってもらう ●就寝	●母親に寝か しつけられる

## 女の暮らしと縮織り

雪国の冬の日常生活で女性の分担した仕事は、男性が生業・家屋の管理・社会生活の維持を主とするのに対して、内面的に家庭生活を守る、いわゆる家事を司ることであり、それに多くの場合育児を伴っていた。家事の基本は、家族の衣・食・住を円滑に維持することである。

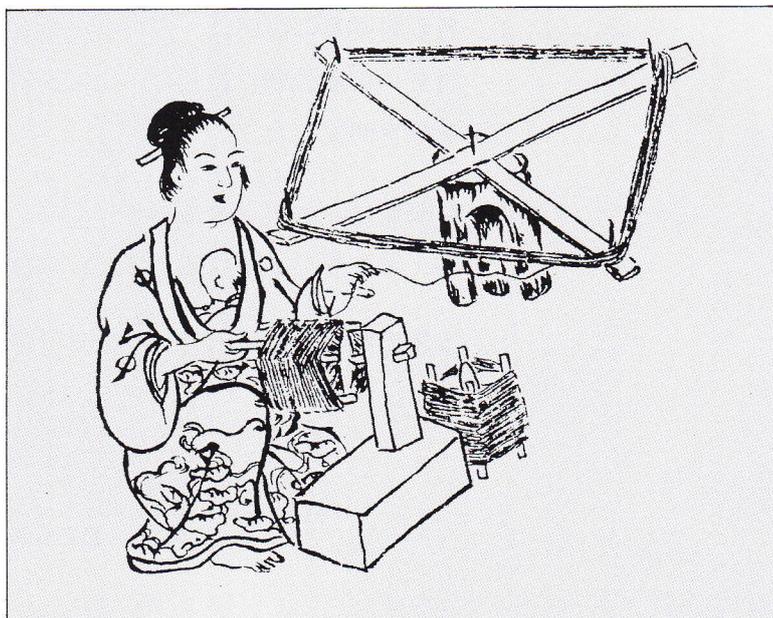
中でも食事は、限られた越冬用の保存食品を切りつめ、食いのばしをはかりながら、朝昼晩と家族たちの腹を充たさなくてはならない。朝はアンボ、昼はカテメシ、夜は雑炊といった食事のパターンは、この食料事情の中の工夫の所産である。

住生活のことは目立たないが、日常生活の中心である焚火の管理がある。焚火の薪も限られている中で、食事を煮炊きし、牛馬の飼料も煮なければならない。暖房・光源にも欠かせない。朝、焚きつける時の火種とする前夜の残り火を保管するのも、女性の役割である。

衣類のことも重要だが、これは重着でも一時は凌げる。とはいっても、女性の立場では気にかかることだから、時間を見出しては繕いをし、成長する子供たちのために洗濯・洗い張り・仕立て直しもする。布小切れもままならぬ時代である。

赤ん坊も家族の中で育つ。母親にしてみれば、もっと細かく見てやりたいのだが、ツグラに入れたまま授乳しなくてはならないのは、嫁の立場だからである。目の離せないようになると家族の力に助けられたが、気づかぬも大きかった。

越後縮のイザリバタ、後に絹織りの高機になる機織りは、古くから当地の女性の冬仕事であった。農家の唯一の収入源であったので、糸づくりから機織りまでそれに専念せねばならず、辛苦の多い日々であった。その功罪はともかく、この地を織物産地に育てた原動力は、この女性たちであった。



■糸繰り「越能山都登」より

## 凡 例

1. 本書は、重要有形民俗文化財「十日町の積雪期用具」（平成3年4月19日付指定）の解説付き図録であり、指定資料及び参考図版を掲載した。
1. 各資料写真の説明は、資料名・指定物件の分類番号・計測値・材質・用途の順に記した。指定資料以外の参考品については、その旨明記した。
1. 計測値は、cm・gを基本単位とし、縦・横・高さ・幅・厚さ・径・重さ等を必要に応じて記した。
1. 本書の解説文は滝沢秀一（十日町市博物館調査研究員）が執筆した。

第1章

衣生活用具



■雪中を出歩く際の身支度 「北越志」より

# ●衣生活用具——寒さへの備え

積雪期の衣料は、基本的には無雪期のものと変わらないが、寒冷な気候に対応して保温性の高い衣類を必要とし、また戸外での作業などで直接雪に触れる履物・外被などは、それに適したものをを用いた。

着物類では、夏場の単物や袷仕立に対して冬はいわゆる綿入が主流となり、下着にも厚手のものを用いる。さらに寒気の折には時にに応じて背中当てなどを重着し、首巻・手袋等によって防寒を補う。

戸外で用いるものの中で、履物は自家製作の藁沓の類を主として履いたが、これらは雪国の特徴を示すも

のと言える。外被の類は、夏季の雨着と同様に、降雪への備えとしたが、同時に防寒用の着装でもあった。

晴着は別として、普段着を大別すると家着と労働着に分れるが、当地方で労働着と言えはヤマギ(野良着)を意味し、上下二部に分れる短着と理解されている。家着は主として長着であるが、特に冬季の仕事着という点から見ると、どちらもそれに含まれるし、別の言い方をすれば、どちらも普段着とも言える。

冬季、成人男子はヤマギに股引が常態で、長着的な普段着は女性・老人・子供たちのものであった。

## 昭和初期ころの

### 農家の冬の家着

※ ( ) 内は下着

成人(男性)	幼 女	成人(女性)	少 年	老人(女性)	老人(男性)
①テヌグイ(鉢巻)	①コドモワタイル	①テヌグイ (アネサンカブリ)	①コドモワタイル	①テヌグイ (バアサンカブリ)	①テヌグイ (フーコカブリ)
②ヤマノノコ	②サンジャクオビ	②ナガワタイル	②サンジャクオビ (メリヤスのシャツ)	②ナガワタイル	②ワタイルバンテン
③ヤマシャツ	③テホイ (メリヤスのシャツ)	③ハンハバオビ		③ハンハバオビ	③サンジャクオビ
④サンジャクオビ		④マエカケ (ジュバン) (コシマキ)		④マエカケ	④ソデナシ
⑤モモヒキ				⑤ハンテン	⑤モモヒキ (ブイトウの肌着)
⑥ズッキレ (フンドシ)				⑥ワタコ (ジュバン) (コシマキ)	(フンドシ)



# イ 被 物

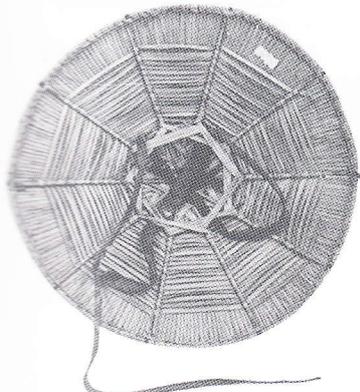
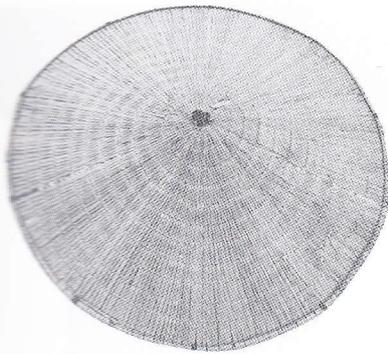
冬季専用の<sup>かぶりもの</sup>被物の類は極めて限られていた。ここに掲げたものの中でも山笠は夏冬を通じ、晴雨にかかわらず男女ともに戸外作業に用いたが、他のものは特殊または近年になって用いるようになったものである。

シュロボシはマミノに併用したが、着用したのは特定の人たちだけであった。フナゾコは真綿を円盤状に糊づけして自製したもので、老人などがホオカブリのようにして用いた。防寒帽は戦時中の防空頭巾の転用で、児童の通学用に利用された。スキー帽は昭和初年ころから市販され、周りに折りたたんだ布を下げると顔まで包めて

便利なので、広く用いられた。また、そのころから毛糸編みなど各種の帽子類が普及するようになった。

当地の農家で製作するスゲボシは、全身を包込む外被だが、日常的な被物としてよく利用された。

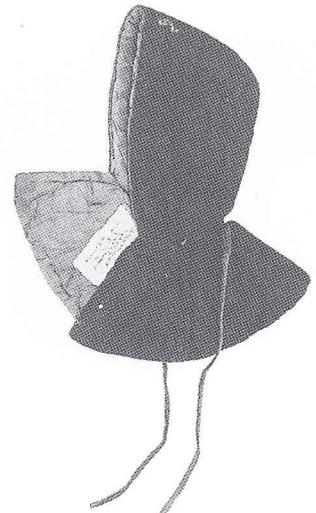
テヌグイの用途は広く、時期を問わず日常の必需品であったが、特に冬季の被物として重要な役割を果たした。寒さの折に、頭・顔を包むホオカブリはその代表的な利用法であったが、女性の場合は、婆さんかぶり、姉さんかぶりなどのように、日常的な一種の装身具として屋内・屋外ともに常用した。



ヤマガサ 1-1-7  
直径46cm 高さ11.6cm 150g  
菅笠 降雪時兼と併用



シュロボシ 1-1-10  
長さ57cm 幅50cm 428g  
シュロ 真蓑と併用



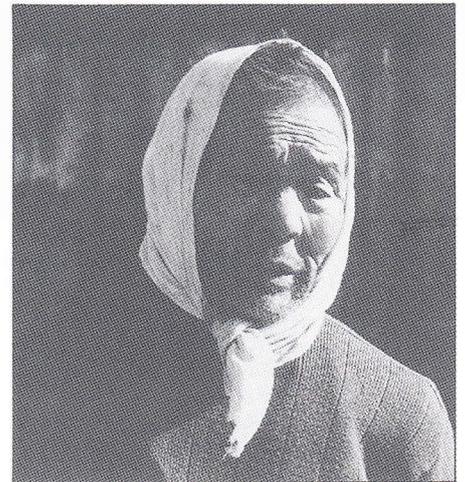
ボウカンズキン 1-1-25  
長さ53.5cm 幅52cm 325g  
木綿 防空頭巾型(綿入) 子供用



フナゾコ 1-1-15  
長さ104cm 幅43cm 62g  
真綿 頭を包む防寒用



スキーボウ 1-1-22  
径17cm 118g  
毛 雪中防寒用帽子



■テヌグイの被り方いろいろ アネサンカブリ(左)、フーコカブリ(中央・右)

# 口着物類

## ① 短着

身丈が短く膝上あたりまでの仕事着、つまり短着<sup>みじかぎ</sup>を当地では一般にヤマギ・ヤマギモンという。これは夏場の野良着の意味であるが、冬にも同形のもを着用することから言えば、仕事着・労働着ということになる。

冬季専用として作られたものは、綿入仕立となるが、当地ではそれをヤマノノコと呼ぶ。ノノコは、綿入着物のことで、長着の場合はナガノノコともいう。

ヤマギは労働着なので、古い布を利用するなど効率的に使うが、荒い仕事に耐える丈夫さとともに働き易さが

要求される。そのため、作り方は大体同じであっても仕立の細部は必ずしも一様ではなく、それぞれに工夫が加えられている。働き易さの工夫は、手の動きを考慮した袖の形の多様さにも表れており、また腰の屈伸を容易にするため、裾の両脇にウマノリを付けることにも見られる。短着は上下二部制であり、男性は下に股引<sup>ももひき</sup>を併用するのが普通である。女性は腰巻または長下着に重ねたが、サンパク・モンペが普及するとそれに併用した。

ハンテンは家庭的な短着で、ヤマギまたは上羽織<sup>うわつぼり</sup>のように用いたが、呼称は混用される場合が多い。



ヤマノノコ 1-0-1  
身丈80cm ゆき55.5cm 775g  
木綿 綿入作業着 男物



ヤマアワセ 1-0-12  
身丈90.7cm ゆき62.8cm 695g  
木綿 袷作業着 男物



ヤマノノコ 1-0-6  
身丈85cm ゆき62.5cm 1,185g  
木綿 綿入作業着 男物



ヤマノノコ 1-0-3  
身丈82cm ゆき64.5cm 824g  
木綿 綿入作業着 女物



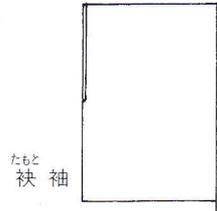
ヤマアワセ 1-0-18  
身丈83cm ゆき63.5cm 470g  
木綿 袷作業着 女物

ても仕  
夫が加  
した  
容易に  
見られ  
併用す  
たが、  
織のよ

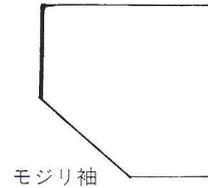


■近所への出歩きの身支度

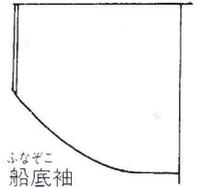
袖の形のいろいろ



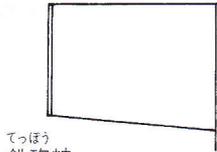
たもと  
袂袖



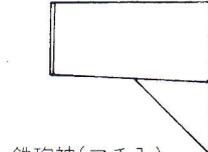
モジリ袖



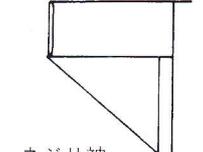
ふなぞこ  
船底袖



てっぽう  
鉄砲袖



鉄砲袖(マチ入)



ネジリ袖



ワタイレバンテン 1-ロ-25  
身丈88cm ゆき65cm 1,250g  
木綿 綿入半纏 男物



ワタイレバンテン 1-ロ-23  
身丈89.5cm ゆき60.9cm 745g  
木綿 綿入半纏 男物



ヤマアワセ 1-ロ-13  
身丈82cm ゆき73.9cm 710g  
木綿 袷作業着 男物



ワタイレバンテン 1-ロ-24  
身丈77cm ゆき63cm 658g  
木綿 綿入半纏 女物

② 長着

長着物には、普段着としての家着があり、ちょこちょこ着などという、ちょっと良い着物、そして本当に良い着物の晴着、さらに正装用の、たとえば紋服などがあるが、冬物は一般的に綿入に仕立てるとか羽織などを重着して用いた。

日常の家着は、くつろぎ用でもあったが、多くの場合はそのまま仕事着としたので、古い布を継ぎはぎして作った。いわゆるブイトウがそれである。袖は手の動き易い筒袖にし、綿入とはせず、寒さの折には重着をして保温をはかった。

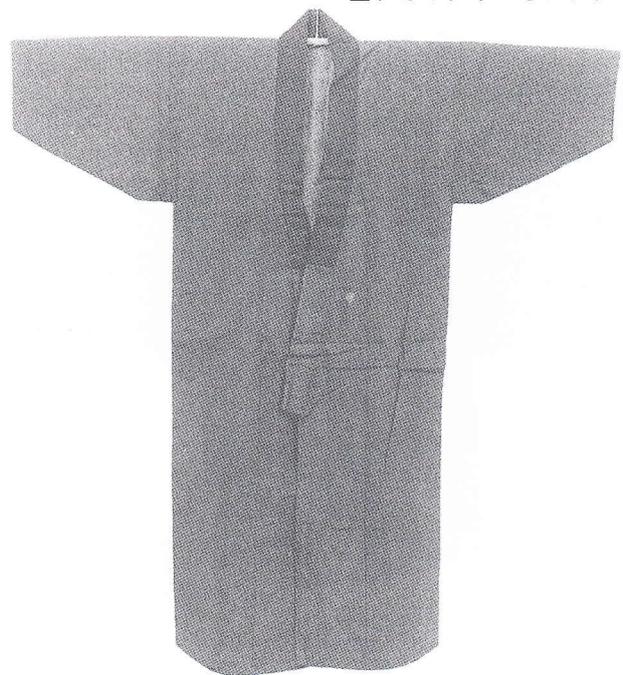
家着としての長着は、主として老人や女性たちが着用したが、着古すと普段着・仕事着・ブイトウにと作り替えて利用し続けた。



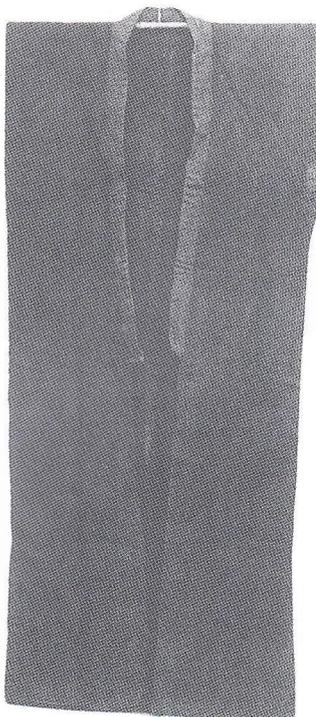
■ナガワタイレとソデナシ姿



ブイトウ Ⅰ-ロー-27  
身丈118cm ゆき58cm 940g  
木綿 重ね継ぎした家着 女物



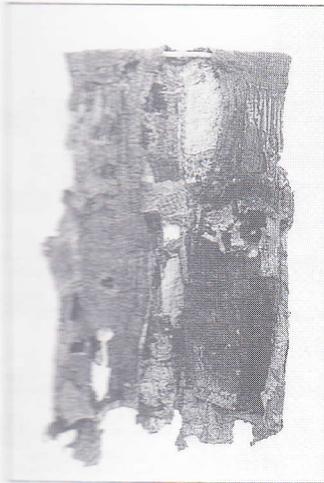
ナガワセ Ⅰ-ロー-32  
身丈122.5cm ゆき60.5cm 835g  
木綿 裕家着 男物



ケツブイトウ Ⅰ-ロー-29  
身丈142.5cm 身幅63cm 735g  
木綿 ゼンマイ採り用



ナガワセ Ⅰ-ロー-33  
身丈120cm ゆき62cm 665g  
木綿 裕家着 女物



■フイトウの袖無



■ケツフイトウ姿

### フイトウ・ケツフイトウ

フイトウは、古い布切れを重ね継ぎした着物でヤマガキとしてよく使ったが、布の入手しにくい時代は長着にもした。小さな端切れも大切に保存して利用するのが、家族の衣料を司る主婦の才覚であった。粗衣ではあるが、荒い仕事には適していた。

ケツフイトウは、雪消え時のゼンマイ採りに用いたもので、長い裾を内側に折込んで袋状にした懐に、採ったゼンマイを収納する。



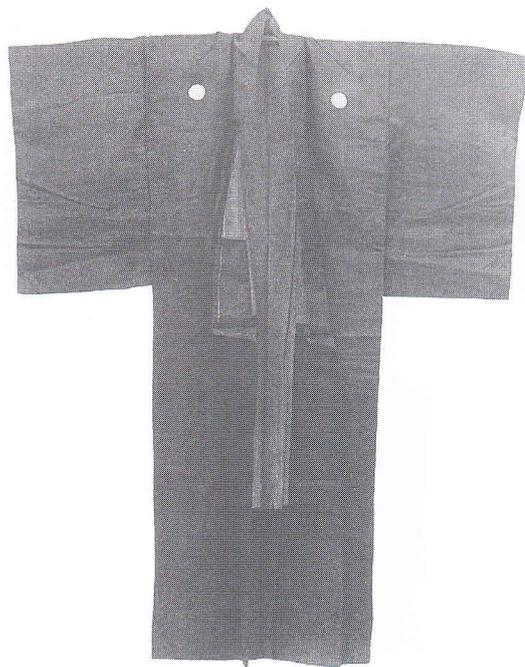
ナガワタイレ |ーロー41  
身丈128cm ゆき63.2cm 1,086g  
木綿 綿入家着 男物



ワタイレモンツキ |ーロー47  
身丈134cm ゆき64.5cm 832g  
木綿 綿入紋服 男物



ナガアワセ |ーロー37  
身丈134.5cm ゆき64cm 930g  
正絹 袷家着 女物



ワタイレモンツキ |ーロー49  
身丈148cm ゆき63cm 413g  
正絹 綿入紋服 女物

③ 下着類

下着には肌着としてのジバン(綿絆)があり、シャツがあり、合着もある。ジバンは主として短い半ジバンだが、長着の下着にする長ジバンもある。老人が、「昔は肌着や下着といっても、みんなブイトウみたいなものを重ねて着たもんだ」と言うように、明治年代までは家着・仕事着にはそれが普通だった。大正年代からメリヤスシャツが出回り、入手し易くなって一般的な肌着となった。

ヤマシャツは男性専用で、夏場はそのまま仕事着ともしたが、冬は下着としても着用した。縞木綿の単物が普

通で自製したが、もともとは若い衆の江戸行から流行したもので、当時ではハイカラな衣料だった。

合着は女性が晴着的な装いをする時に主として用い、着物と肌着の間に着たものであった。

禪は男の下着で、以前は長尺の六尺禪を締めるのが普通であったが、その後、モッコ禪・越中禪などと呼ぶ短尺のものが、パンツなどの普及で一般的になった。

腰巻は女性の常用する肌着の一種で、短着の下半体にまとして仕事着ともし、冬季はネルや衾仕立に替えた。また、防寒の意味で男性も長着に併用することがあった。



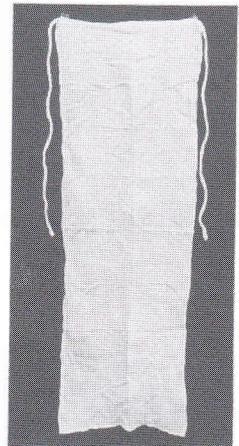
アイギ 1-ロー-58  
身丈140cm ゆき61.5cm 458g  
正絹 縮入合着 女物



ヤマシャツ 1-ロー-66  
身丈70cm ゆき61.2cm 214g  
木綿 縞シャツの下着 男物



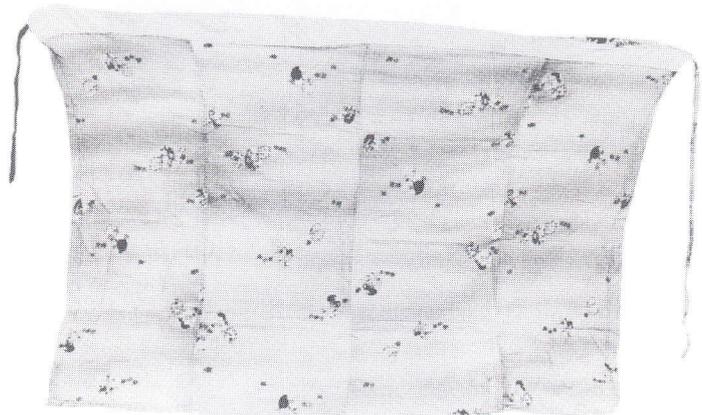
ハダギ 1-ロー-65  
身丈61.6cm ゆき46.3cm 370g  
メリヤス 肌着 女物



フンドシ 1-ロー-168  
91×34cm 35g  
木綿 越中禪 男物



ジュバン 1-ロー-62  
身丈112cm ゆき62cm 598g  
木綿 下着 女物

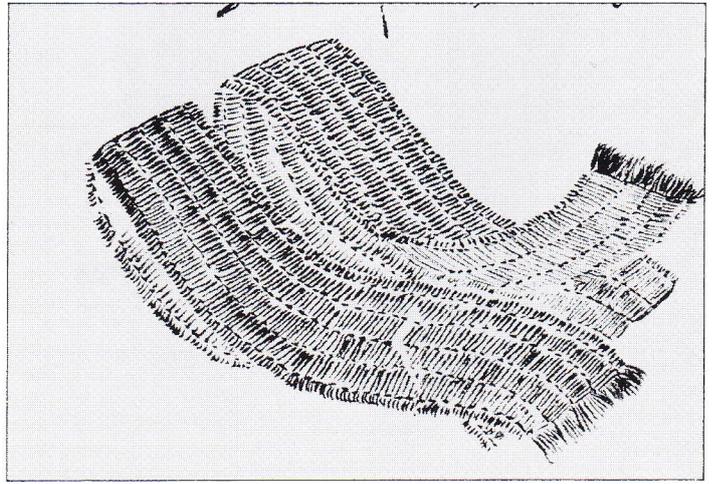


コシマキ 1-ロー-174  
長さ77cm 幅124cm 225g  
正絹・木綿 衾仕立腰巻 女物

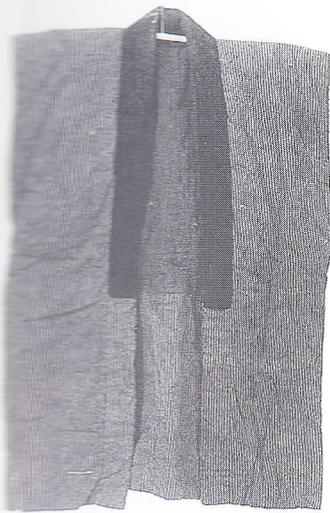
4 毛織物

毛織物は綿入であるが、手の動きが自由なので作業用の服装に適している。したがって短着に重ねることが多いが、長着にも羽織ったし、軽便な保温衣類として、老若男女も問わず広く日常的に着用した。

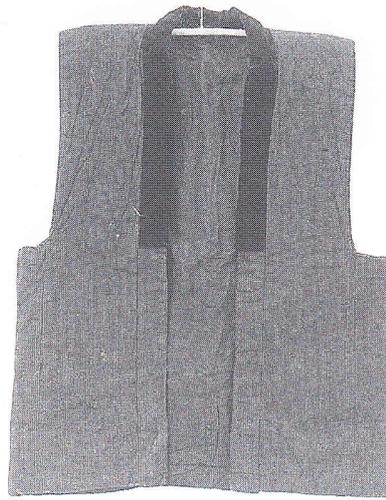
右側のアングインソデナシは、織布以前・木綿以前の布で作られる編布の袖無で、当地周辺地域では、明治年代まで主要な、実用されていた。また、袖無の前身を省略したものに、背中当の類がある。



■アングイン 「越能山都登」より



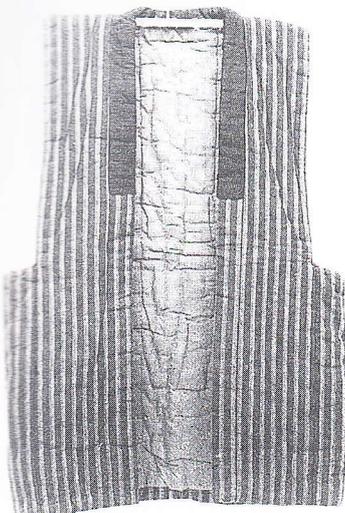
ソデナシ 1-ロー-73  
身丈92cm 803g  
木綿 綿入袖無 男物



ソデナシ 1-ロー-75  
身丈77cm 680g  
木綿 綿入袖無 男物



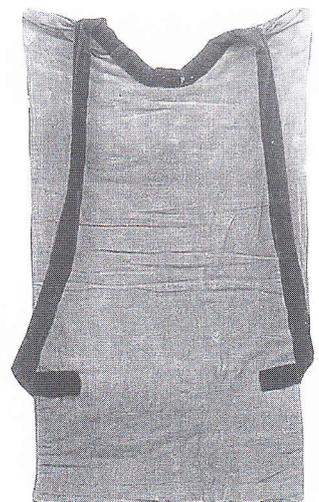
ソデナシ 1-ロー-79  
身丈72.5cm 287g  
正絹 綿入袖無(背中当型) 女物



ソデナシ 1-ロー-76  
身丈78cm 648g  
木綿 綿入袖無 女物



ソデナシ 1-ロー-78  
身丈71.4cm 342g  
木綿 綿入袖無 女物



セナカアテ 1-ロー-101  
身丈69.5cm 285g  
ウール 綿入背中当 女物

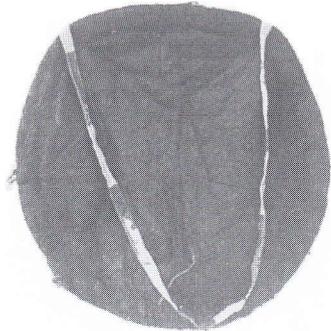
## ワタコについて

ワタコは、<sup>また</sup>真綿を用いて自製した背中当りの一種であり、軽く保温性が高いので、女性が日常的に用いた。作り方は、<sup>まんじゅう</sup>饅頭形の型の上に真綿をのばして重ね、表面に糊を刷いて形を整える。さらに乾燥させてから<sup>えり</sup>杉布や<sup>ひも</sup>紐をつけて着用する。

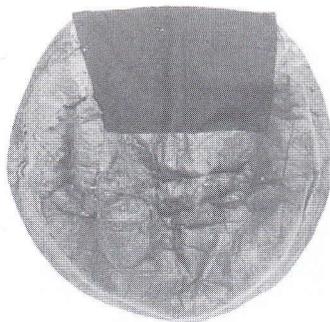
当地は養蚕地であったから、材料となる<sup>たままゆ</sup>玉繭・<sup>くずまゆ</sup>屑繭の自家調達が可能で、どの家でも作って用いたものであった。当地の特徴的な保温衣料である。



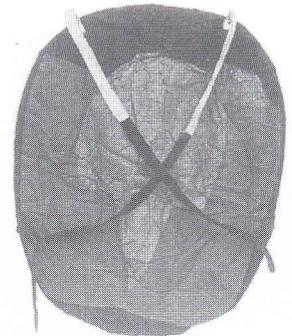
■ワタコを着用したようす



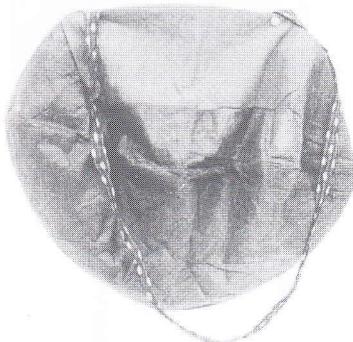
ワタコ 1-0-83  
丈50cm 幅50cm 108g  
真綿 背中覆い 濃緑染め



ワタコ 1-0-85  
丈61cm 幅72cm 134g  
真綿 背中覆い 緑染め



ワタコ 1-0-87  
丈68cm 幅56cm 380g  
真綿 背中覆い 緑染め



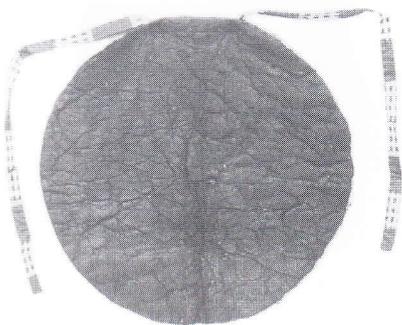
ワタコ 1-0-86  
丈58cm 幅78cm 120g  
真綿 背中覆い 濃緑染め



ワタコ 1-0-89  
丈51cm 幅51cm 100g  
真綿 背中覆い 黒染め



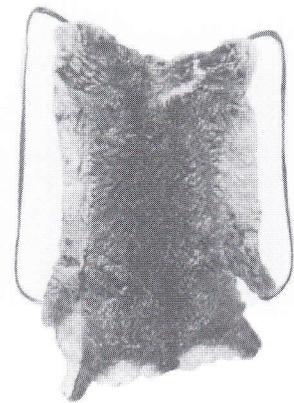
ワタコ 1-0-97  
丈39cm 幅38cm 38g  
真綿 背中覆い 薄紫染め



ワタコ 1-0-95  
丈49cm 幅49cm 90g  
真綿 背中覆い 紫染め



カメノコ 1-0-100  
丈50cm 幅35cm 180g  
正綿 真綿入背中覆い

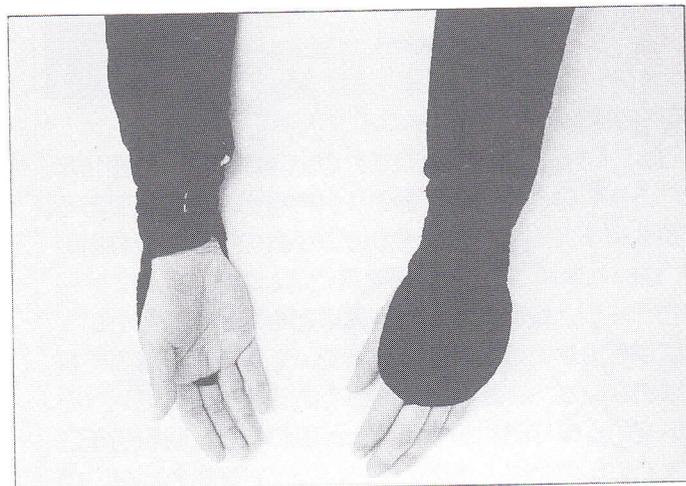


セナカアテ 1-0-103  
丈53cm 幅37cm 115g  
兔毛皮 背中当

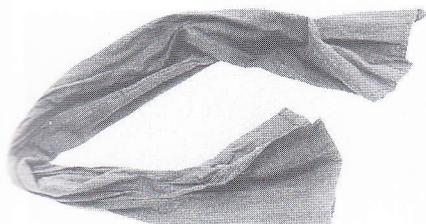
㊦ 首巻・手甲類

首巻・手甲などは、上体衣料の補助具的なものだが、雪中の外出や作業には有効なものだった。首巻には日常手拭を適宜巻いたりするが、老人は適当な黒布などを専ら利用していた。また老婆たちは、三角形の肩掛を兼用することが多かった。若い女性には、かつて衿巻が流行したが、肩掛（ショール）がこれにかわった。

裏手袋は自製品だが、雪中作業には適していた。手甲の類は女性が野良仕事に着けたが、冬季も機織りなどの手作業の際に、シモヤケ・アカギレ予防の防寒用に着けた。



■ウデヌキを着用したようす



クビマキ 1-ロー-105  
長さ90cm 幅35.5cm 39g  
藍木綿 首巻 男物



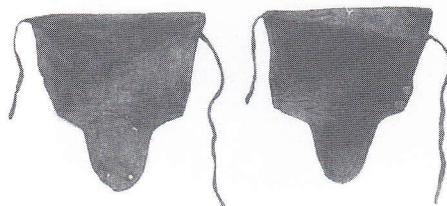
クビマキ 1-ロー-107  
長さ116cm 幅31cm 403g  
真綿 首巻 女物



カタカケ 1-ロー-112  
長さ151cm 幅29.5cm 130g  
正絹 ショール 女物



ウデヌキ 1-ロー-119  
長さ38cm 幅13.8cm 26g(片方)  
木綿 腕覆い兼手甲 女物



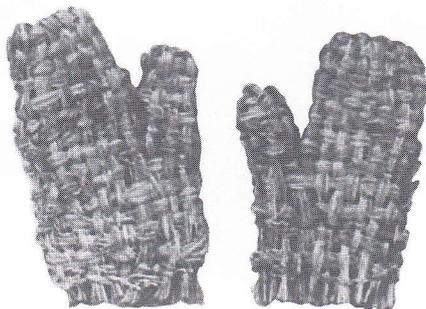
テッコ 1-ロー-115  
長さ25.2cm 22.5g(片方)  
木綿 手甲 女物



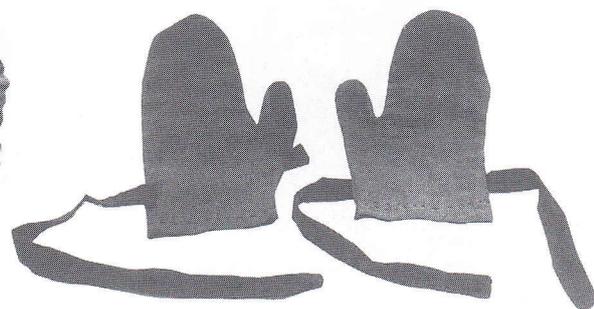
テッコ 1-ロー-116  
長さ18.1cm 幅20.1cm 17g(片方)  
木綿 手甲 女物



テブクロ 1-ロー-120  
長さ27cm 幅11.4cm 63g(片方)  
藁 作業用手袋



テブクロ 1-ロー-121  
長さ26.5cm 幅13.2cm 102g(片方)  
藁 作業用手袋



テブクロ 1-ロー-124  
長さ24.5cm 25g(片方)  
木綿 作業用手袋

◎ 子供着

「着ぶくれ」という言葉ですぐ思い浮かぶのは、昭和10年代ころまでの、特に低年齢の子供の冬の普段着姿である。衣類は潤沢でなく、遊びごかりの子供の衣類は破れ易いが、繕いもままならず、重着で凌ぐことが多かった。

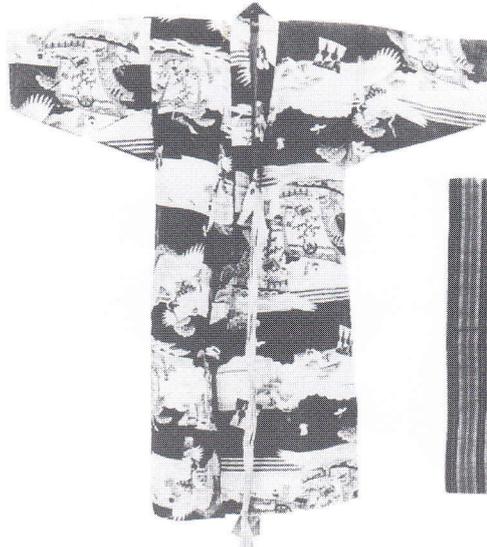
右ページ上段に掲載した写真は春の雪消え時のもので、風はまだ冷たいが気候は春めいていて、あまり着ぶくれではないが、まだ雪中の装いである。下体にモンペをはいているので昭和20年代ころと思われる。昭和初年ころまでの年少児は、着物の下にパンツも腰巻もしないの

が普通だった。大人の婦人もほぼ同じだが、モンペが普及したのは太平洋戦争中で、それが子供にも反映したのである。このころからゴム長靴を広く履くようになり、洋服も当時の学童服から一般に着られるようになった。

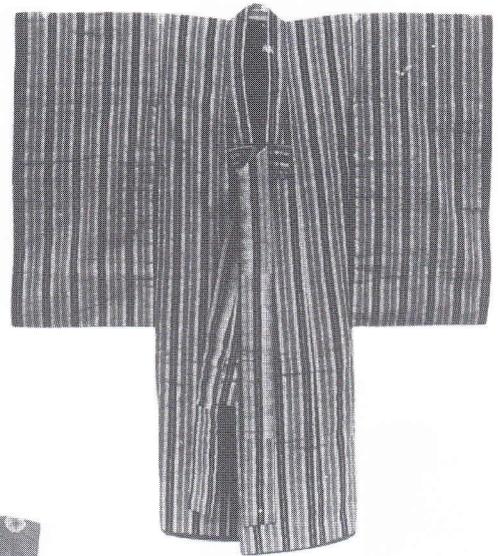
また、子供の冬着物も仕立て方の違いはあっても、大人同様に綿入がその代名詞であった。寒い日、幼い子には袖無のチャンチャンコ、年長児には羽織・ハンテンなどを着せて通学させた。保温とともに学童らしい身づくりの配慮でもあった。紋付・オビギは、新生児の宮参りに着せた晴着である。



ウブギ 1-10-127  
身丈66.5cm ゆき30cm 450g  
メリンス 産着 男児用



コドモワタイル 1-10-147  
身丈83cm ゆき41.5cm 450g  
パラマン 綿入長着 男児用



オビギ 1-10-134  
身丈94cm ゆき42cm 430g  
正絹 晴着用産着 男児用



コドモワタイル 1-10-153  
身丈98.5cm ゆき48.5cm 640g  
木綿 綿入長着 女児用



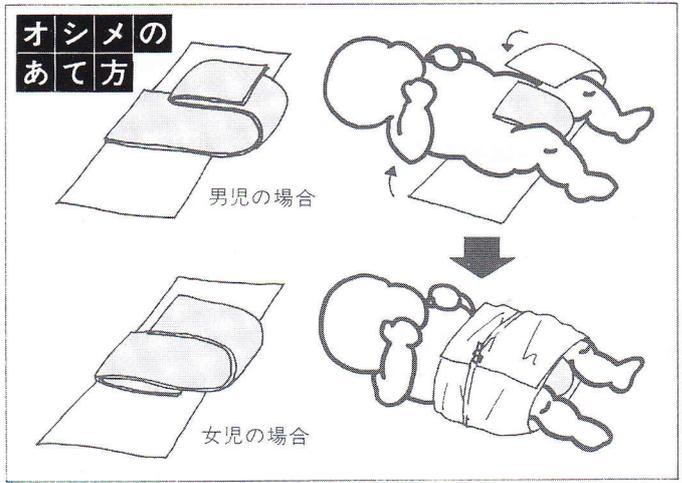
コドモアワセ 1-10-140  
身丈55cm ゆき31.5cm 155g  
木綿 袷長着 男児用



コドモモンツキ 1-10-155  
身丈103.5cm ゆき49.5cm 755g  
木綿 袷紋服 女児用



■昭和20年代ころの子供たち



コドモホリ |ーロー156  
身丈65.5cm ゆき53cm 366g  
スフガスリ 袷羽織 男児用



コドモバンテン |ーロー158  
身丈60cm ゆき44cm 350g  
木綿 綿入半纏 男児用



コドモホリ |ーロー157  
身丈56.5cm ゆき41cm 212g  
メリンス 袷羽織 女児用



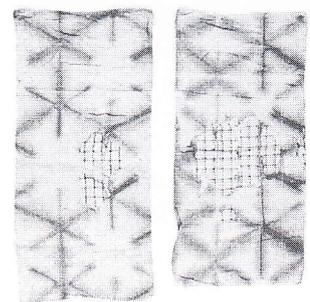
コドモバンテン |ーロー159  
身丈58cm ゆき39.2cm 320g  
正絹 綿入半纏 女児用



チャンチャンコ |ーロー162  
身丈49cm 185g  
パラマン 綿入袖無 男児用



チャンチャンコ |ーロー165  
身丈47cm 185g  
木綿 綿入袖無 女児用

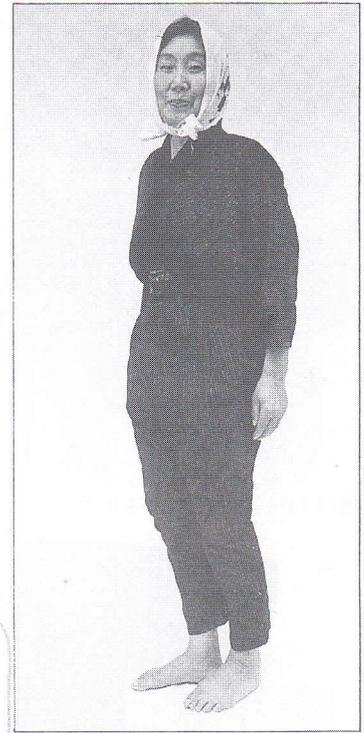


シメシ |ーロー180  
68.3×32cm 70g  
木綿 幼児用おむつ

⑦ 股引類

股引ももひきは、短着の下衣として野良稼ぎなどに着用したが、冬季にもヤマギには併用するし、防寒用として長着の下に用いることもあった。単仕立が一般的であるが、特に冬用として裾に作ったものも希にある。古くは、布地の不足から、後に水田仕事専用になった半股引すねあてが普通で、野良仕事などには下に脛当を併用した。

股引は、主として男性が用い、女性が用いることは少なかったが、昭和初期ごろからサンパクを老女などがはき、太平洋戦争のころからモンペが普及し、女性一般が日常用いるようになった。股引は肌に直接つけてはくが、サンパク・モンペは、着物を包込んで上に着けるので、長着の場合にも用いた。保温用にもなり雪中歩行には便利であった。

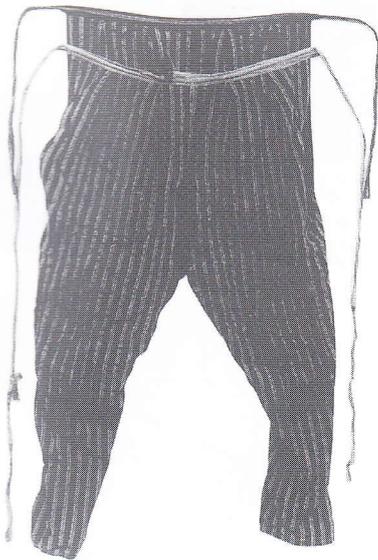


■ヤマアワセとサンパク姿



アワセモモヒキ |ーロ-190  
丈82.5cm 368g  
紺木綿 裏地付股引 男物

モモヒキ |ーロ-187  
丈82.6cm 225g  
紺木綿股引 男物



サンパク |ーロ-199  
丈90cm 230g  
木綿 作業用山袴 女物



モンペ |ーロ-203  
丈84cm 320g  
木綿 作業用山袴(ズボン型) 女物



モンペ |ーロ-204  
丈99.5cm 131g  
木綿 作業用山袴(ズボン型) 男物

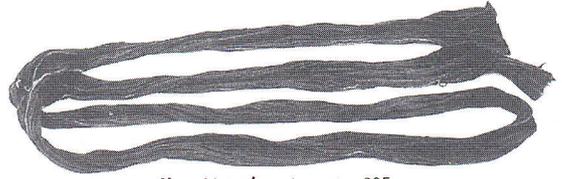
③ 帯・前掛類

帯には、たとえば夏帯など季節用のものもあるが、一般的には四季を通じて兼用することが多かった。

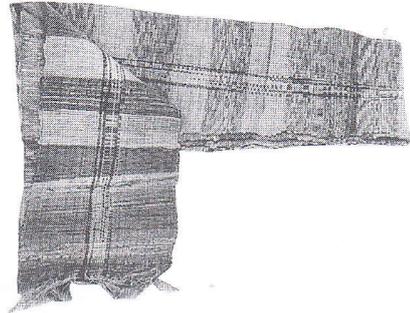
仕事着用は、男はサンジャク（兵児帯）、女は半幅帯が普通で、サキオリ風のボロオビを手織りして用いたりもした。冬季は保温用に厚手のものにした。

前掛は女性が常時着用すべきものとされていて、冬用は厚地が裕仕立のものにした。男性は日常用いないが、荒い仕事などの際には着物を保護するために用いた。

腰布団は冬季保温用に女性が腰に巻いたものである。



サンジャク 1-ロ-205  
長さ298cm 幅22cm 124g  
木綿 三尺帯 男物



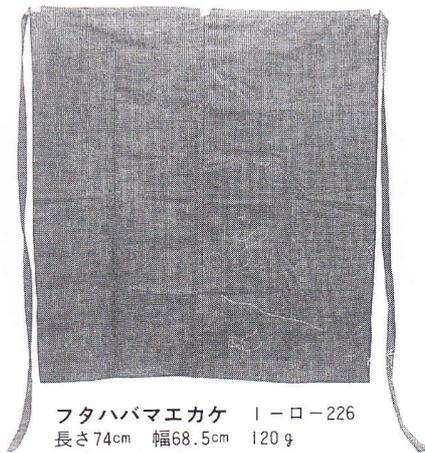
ヤマオビ 1-ロ-211  
長さ293cm 幅17.5cm 280g  
木綿・メリンス 作業着用帯(サキオリ) 女物



フクロオビ 1-ロ-218  
長さ193cm 幅32cm 877g  
正絹 正装用帯 女物



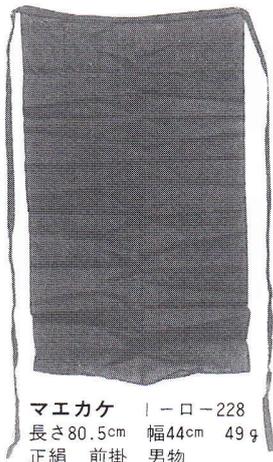
ヤママエカケ 1-ロ-224  
長さ68cm 幅45cm 206g  
木綿 作業用前掛(転用) 男物



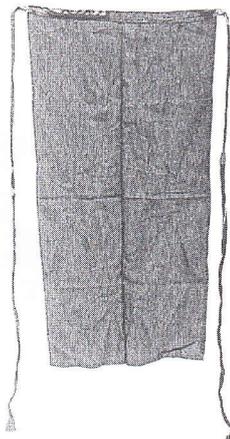
フタバマエカケ 1-ロ-226  
長さ74cm 幅68.5cm 120g  
木綿 二幅仕立の前掛



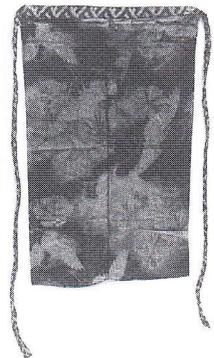
コシブトン 1-ロ-233  
長さ32cm 幅81.5cm 235g  
木綿 保温用腰布団 女物



マエカケ 1-ロ-228  
長さ80.5cm 幅44cm 49g  
正絹 前掛 男物



マエカケ 1-ロ-232  
長さ69cm 幅35cm 65g  
木綿 前掛 女物



マエカケ 1-ロ-234  
長さ51.5cm 幅32cm 50g  
メリンス 前掛 女児用

◎ 脛当類

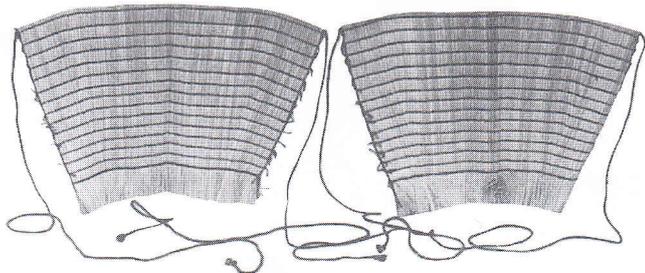
脛当<sup>すねあて</sup>は、屋外作業の足ごしらえに、夏・冬ともに用いた。夏は脛の保護、冬はそれと兼ねて防寒用とした。日常的には男性の使用が多く、股引に重ねたが、古くは半股引、または山袴<sup>やまばかま</sup>で膝<sup>ひざ</sup>まで覆い、その下に着けた。女性は股引をはかず素足の脛に着けるので、布製であった。脛当を当地ではハツパキ（ノバキ）またはキャハンというが、ハツパキを藁などの自製品、キャハンを布製のものとして呼び分けている場合が多い。

自製するハツパキの材料は藁が通常で、上質のものは

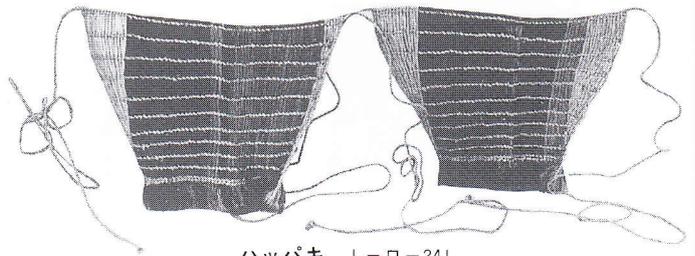
ヌイゴ(ミゴ)を抜いて作る。また、雪中用にはガマの葉製のものが、雪の付着も少なく濡れにくいので珍重された。藁は打って柔らかくし、ガマはそのまま編んで作る。

布製キャハンの男物は市販品が普及したが、濡れ易く雪中には適さない。女性の場合は主として旅装用であり、嫁入道中には甲斐絹<sup>かいき</sup>キャハンを嫁が着けた。冬、老女や通学児童が用いたのは袋ノバキ<sup>まき</sup>で、布を筒状にして上下を結ぶ紐を取りつけてはいた。

巻キャハン(ゲートル)が当地に普及したのは、大正年間ころからで、軍隊からの影響であった。



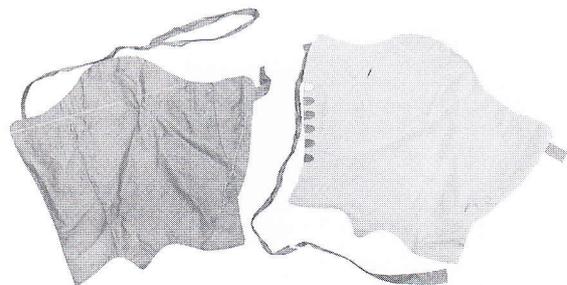
ハツパキ 1-ロー-237  
長さ28.7cm 102g(片方)  
ガマ 脚絆



ハツパキ 1-ロー-241  
長さ26.5cm 118g(片方)  
藁・木綿 脚絆



キャハン 1-ロー-246  
長さ36.5cm 35g(片方)  
紺木綿 脚絆 男物



カイキキャハン 1-ロー-249  
長さ32cm 23g(片方)  
絹 脚絆 女物



フクロキャハン 1-ロー-251  
長さ31cm 27g(片方)  
ネル 筒型脚絆 女児用



マキキャハン 1-ロー-250  
長さ398.5cm 幅8.7cm 106g(片方)  
ランシャ ゲートル型脚絆 男物

# ハ履物

## ① 外履用（藁製履物）

雪中の履物の素材として、藁は毛皮などを除けば最適のものであった。軽量で保温性がある上、農家では入手が容易であり、製作技術も修得していた。

藁製の履物は、ゾウリ・ワラジなど平底のみのものから、足の甲を覆う短沓型、さらに脛当部分をつけた長沓型も作られるようになって、ゴム靴類の出現までは履物の主流であり、特に雪中用として有効であった。

作り方の細部を見ると、編み方・形式などにさまざまな工夫・改良のあとがうかがわれ、地域的な変化も見る

ことができる。

このページに掲げたものは、当地でスッポンと呼んでいる長沓形式のものだが、甲の組み方も一様でなく、脛当部分にしても単に円筒状のものと、前方を開いて脛に巻きつけ易くしたもの、また子供用の小型のものもある。

最下段右のクツズッポンは、次ページ下段のワラグツと脛当を組合せたものだが、他のものが沓部分の藁を立上げて脛当部分とするのに対して、沓部分と脛当部分を別に編んで、製作過程で組合せている。この形式は、カンジキが着け易く、道踏み用に適していた。



スッポン 1-1-23  
高さ35.5cm 沓長さ28.5cm 250g (片方)  
藁 長沓型(円筒型)



スッポン 1-1-27  
高さ15.8cm 沓長さ16.2cm 83g  
藁 長沓型(円筒型) 子供用



スッポン 1-1-20  
高さ35cm 沓長さ27.2cm 350g (片方)  
藁 長沓型(円筒型)



スッポン 1-1-39  
高さ25cm 沓長さ27.5cm 272g  
藁 長沓型(筒部前開き型)



スッポン 1-1-31  
高さ19.8cm 沓長さ20.6cm 79g (片方)  
藁 長沓型(円筒型) 子供用



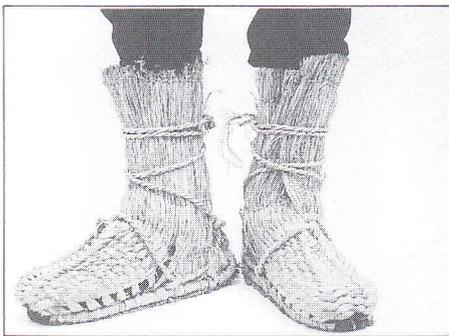
スッポン 1-1-36  
高さ27cm 沓長さ26cm 250g (片方)  
藁 長沓型(筒部前開き型)



クツズッポン 1-1-41  
高さ41cm 沓長さ30cm 575g (片方)  
藁 長沓型(沓部藁沓型)

# 藁製履物の組合せ例

履物の 組合せ	スッポン	クツズッポン	ワラグツ	
	(保温用にシビ・青い杉葉など下に敷く)		シブガラミ	
主な用途 など	長沓型。雪の深いとき、また、足の保温に用いる。脛当部は円筒型と前開き型がある。クツズッポンに対してスッポンとズッポンともいう。	長沓型の別種でワラグツにノバキ(脛当)部分を取りつけて作る。カンジキが着け易く、道踏み用に適している。	スリッパ型。浅雪のときや、近所 <sup>なまわ</sup> の出歩き用に履く。生藁を用いて組む。浅い降雪をクツ雪などという。	これをカカト部分に巻いて、ワラグツと併用し、降雪時などに履く。



■スッポン(筒部前開き型)



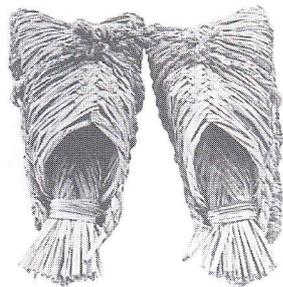
■ワラグツとシブガラミ



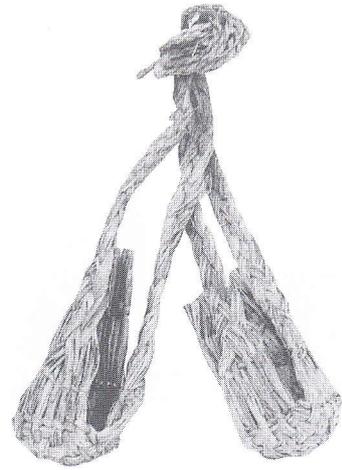
■ワラグツとイタチ



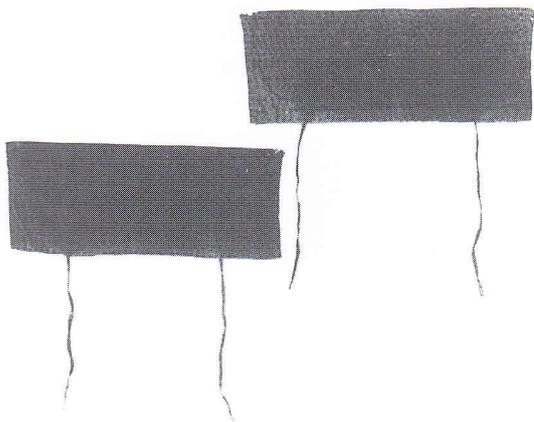
スッポン 1ーハ-34  
高さ32.5cm 沓長さ27cm 564g(片方)  
藁 長沓型(筒部前開き型)



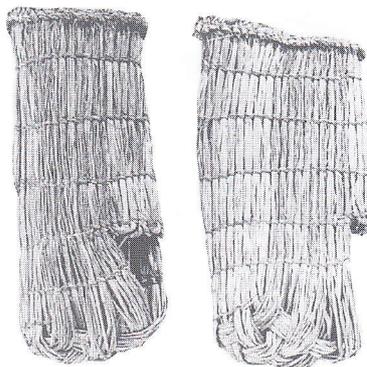
ワラグツ 1ーハ-1  
長さ27.9cm 幅13.3cm 158g(片方)  
藁 スリッパ型短沓



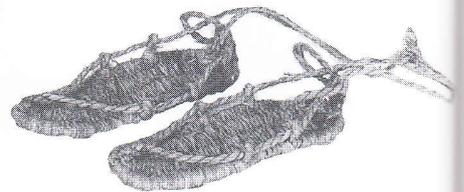
シブガラミ 1ーハ-12  
全長81cm 幅9.5cm 64g(片方)  
藁 踵に巻いて藁沓と併用



コウカケ 1ーハ-78  
17×41.5cm 25g(片方)  
木綿 スッポンなどの下げき

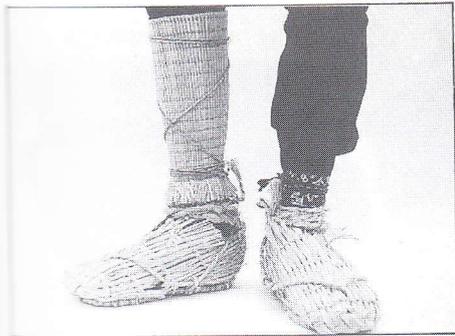


イタチ 1ーハ-18  
長さ30.8cm 幅9cm 97.5g(片方)  
藁 筒型(藁沓併用)

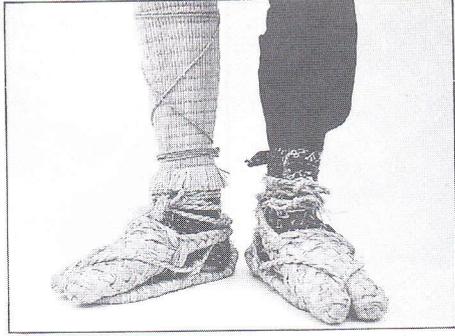


ワラジ 1ーハ-58  
長さ25cm 幅8.9cm 86g(片方)  
藁 雪中オソカケやツマカケと併用

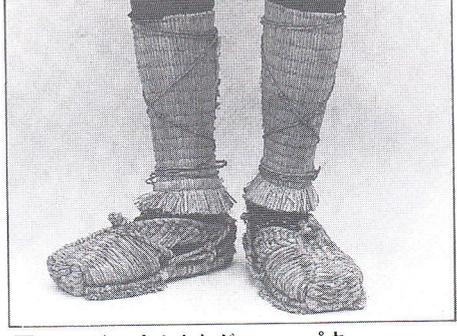
イ タ チ	ワ ラ ジ		ス ッ ペ
	オ ソ カ ケ	ツ マ カ ケ	コウカケ・ ガマハツパキ
降雪時などにワラグツと併用する脛当の一種で、シブガラミと同じ用途。	ワラジを雪中で履く時、足の甲と爪先を覆うオソカケと組合せて履く。これをオソカケワラジという。脛当と併用する。	オソカケと同じ用途だが、ツマカケは指先が二股に分れ、これを足に付けてからワラジを履く。	雪中用短沓。歩行や作業に適す。布製のコウカケで足の甲を覆うように巻いてから履く。脛当を併用する。



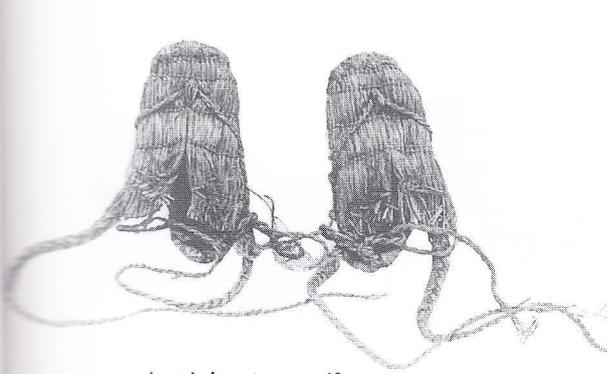
■ オソカケワラジとコウカケとガマハツパキ



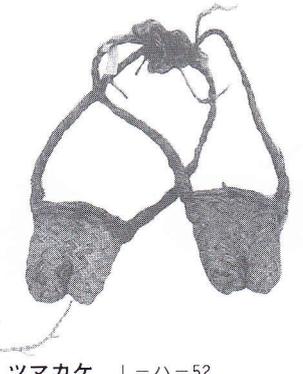
■ ツマカケワラジとコウカケとガマハツパキ



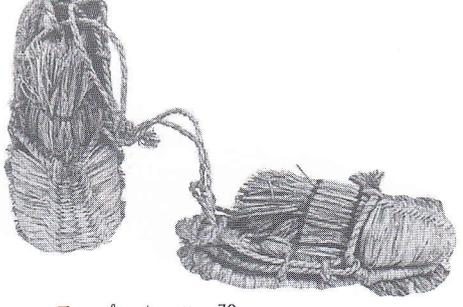
■ スッペとコウカケとガマハツパキ



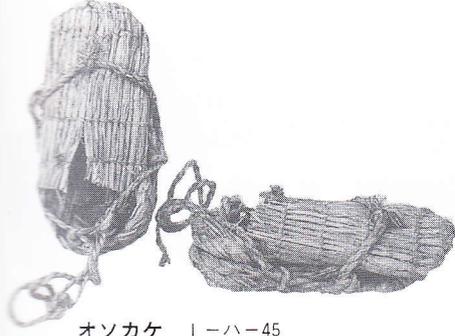
オソカケ 1-ハ-43  
長さ28cm 幅14cm 187g(片方)  
藁 足の甲に掛け草鞋と併用



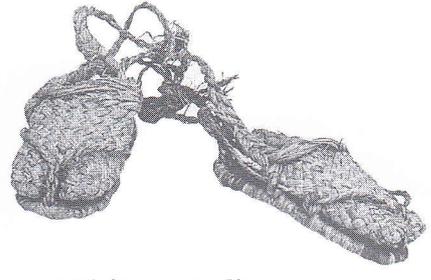
ツマカケ 1-ハ-52  
長さ11.5cm 幅7.8cm 45g(片方)  
藁 足袋型爪先覆い 草鞋と併用



スッペ 1-ハ-72  
長さ28.5cm 幅13.5cm 220g(片方)  
藁 雪中用短沓



オソカケ 1-ハ-45  
長さ24cm 幅10cm 140g(片方)  
藁 足の甲に掛け草鞋と併用



ツマカケ 1-ハ-50  
長さ24cm 幅12cm 200g(片方)  
藁 足袋型爪先覆い 草鞋と併用



スッペ 1-ハ-62  
長さ30cm 幅12.7cm 256g(片方)  
藁 雪中用短沓

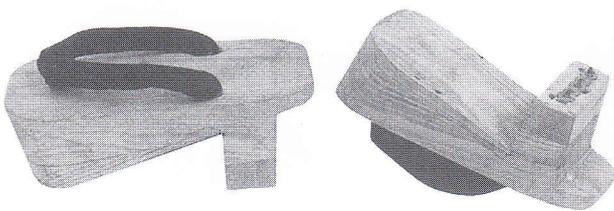
## ② 外履用（木製履物）

当地の雪中用下駄類は、下の写真に大別できるが、雪の状態によって適したものを<sup>こま</sup>用いた。たとえばアシダは初雪のころのぬかるみ道に限るし、ユキゲタはいわゆる駒下駄の<sup>こま</sup>歯に雪の付着を防ぐ工夫がされ、さらに滑り止め金具が打ちつけられているが、主として街の<sup>かみ</sup>雁木通り用で雪道には適さない。その点でハコゲタは、雪道専用に考案されており、前歯部分を三角形に傾斜させ、裏側を<sup>くり</sup>引抜いて蓋をつけ、雪の付きやすい鼻緒の結び目を隠す。したがって、固い雪道も歩くことができる。前記の雁木通りは通常無雪に近く、いずれの下駄も使用できた。

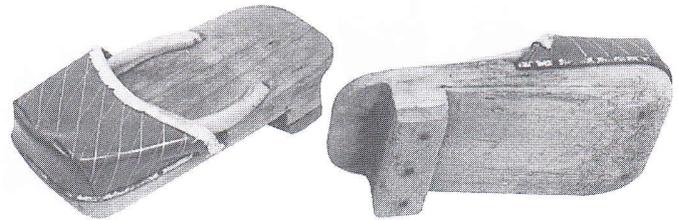
次ページに示す下駄は古い形式であり、玄関などの地面が雪水で汚れた場合、藁沓は適さないので、門先や便所歩き用に主として用いた。



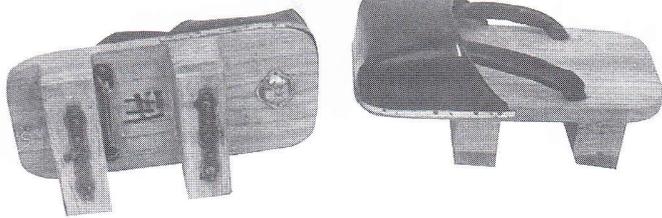
■ 出歩きの様子



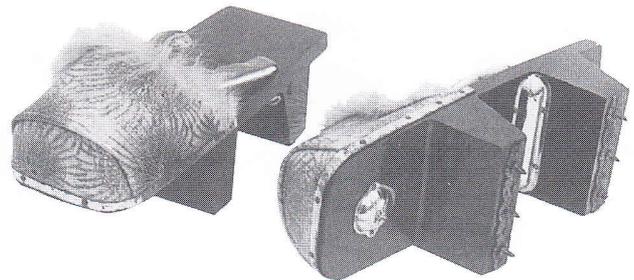
ハコゲタ 1-ハ-84  
長さ21.7cm 幅10.6cm 286g(片方)  
桐 前歯を箱状とした下駄 男物



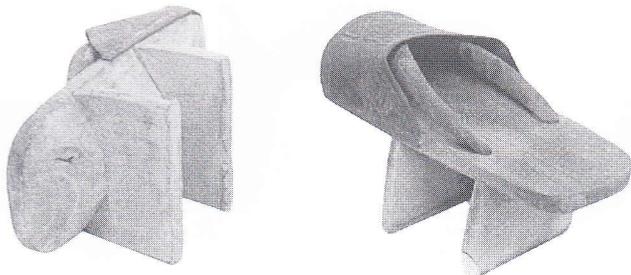
ハコゲタ 1-ハ-86  
長さ22cm 幅11.7cm 185g(片方)  
桐 前歯を箱状とした下駄 女物



ユキゲタ 1-ハ-94  
長さ23.6cm 幅10.9cm 320g(片方)  
桐 滑り止め金具付駒下駄 男物



ユキゲタ 1-ハ-95  
長さ22.5cm 幅7.6cm 218g(片方)  
桐 滑り止め金具付駒下駄 女物



アシダ 1-ハ-101  
長さ22.4cm 幅11cm 272g(片方)  
桐 差歯高下駄 男物

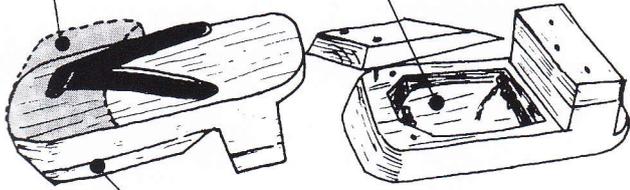


アシダ 1-ハ-100  
長さ22.3cm 幅9cm 317g(片方)  
桐 差歯高下駄 女物

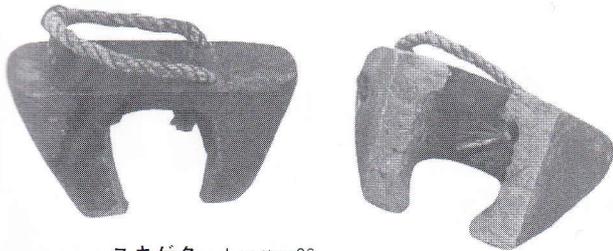
## 箱下駄の工夫

防寒・防水用のツマ皮

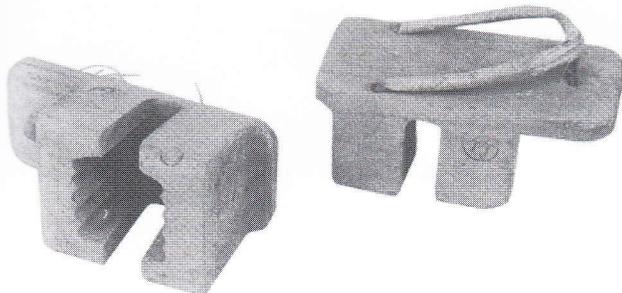
中は箱形に刳抜かれ、鼻緒を通した紐は箱の中で結ばれる。



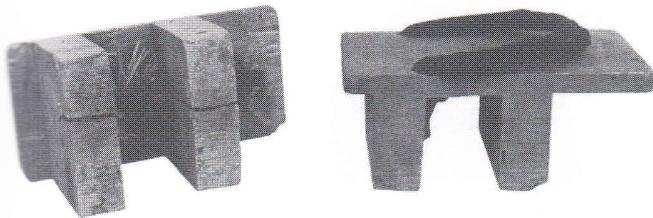
前歯を無くし自然な傾斜をつけ、先端を厚くしている。



ユキゲタ 1-ハ-96  
長さ23.8cm 幅13.7cm 高さ10.8cm 420g(片方)  
桐 浅雪・ぬかるみ道用下駄



ユキゲタ 1-ハ-97  
長さ23.6cm 幅12.5cm 高さ9.4cm 380g(片方)  
桐 浅雪・ぬかるみ道用下駄



ユキゲタ 1-ハ-99  
長さ23.5cm 幅12.3cm 高さ9.8cm 560g(片方)  
桐 浅雪・ぬかるみ道用下駄

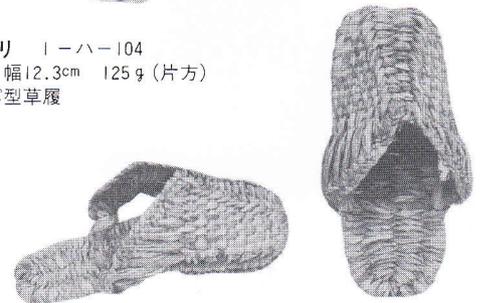
## ③ 内履用

冬季に屋内用の履物とした藁沓は、写真で見るようにスリッパ風のもので、前掲のスッペの作り方と基本的に同じことからスッペゾウリという。水屋や土間の仕事に主として用いたが、ゾウリに比べて爪先に覆いがつくので保温性があったが、古くは素足が普通であった。

足袋を屋内で用いたのは、あまり古いことではない。当初はむしろ外出用で、それもはじめは型紙の用意をして自製した。正月に買った足袋が破れると刺し継ぎをし、雑巾のようになってから家履用とした。



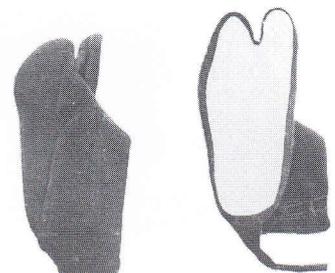
スッペゾウリ 1-ハ-104  
長さ25.6cm 幅12.3cm 125g(片方)  
藁 スリッパ型草履



スッペゾウリ 1-ハ-105  
長さ25.7cm 幅13.2cm 115g(片方)  
藁 スリッパ型草履



タビ 1-ハ-108  
長さ25cm 幅10.2cm 50g(片方)  
コール天 足袋 男物



タビ 1-ハ-116  
長さ19.6cm 幅8.1cm 34g(片方)  
木綿 足袋 子供用

## 二 雨具・防寒具

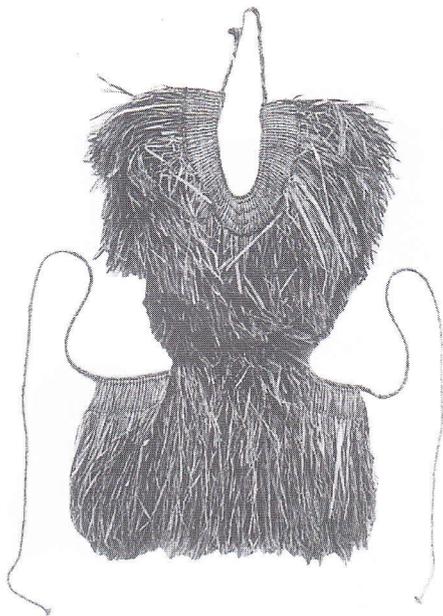
### ① 蓑類

蓑は、山笠と併用する年中の雨具であり、また雪具でもあった。主な材料はヒロロ（ミヤマカンスゲ）だが、これは軽くて水はけがよく、また蓑の前面は開放しているので仕事しやすく、農家の必需品の一つであった。

マミノは、タツノケなどを主材とするが、当地で自製する人は少ない。それはマミノがいわゆる旦那衆や商家の人などの、いわば、よそ行き用であったからのようだ。これと併用するシュロボシも購入品であった。マエアテの類は、降雪時の作業の際に着けて前を覆った。



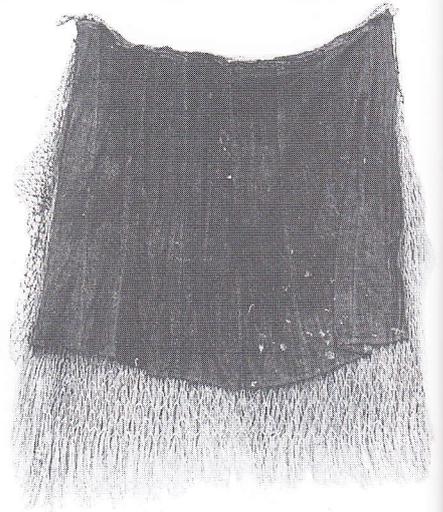
■蓑を着たようす



ミノ 1-1-3  
丈90cm 幅60cm 890g  
ヒロロ(ミヤマカンスゲ)  
降雪時作業用外被



マミノ 1-1-8  
丈100cm 幅127cm 1,043g  
タツノケ(コシノホンモンジスゲ)  
降雪時外出用外被



マミノ 1-1-9  
丈110cm 幅90cm 1,055g  
タツノケ(コシノホンモンジスゲ)・カラムシ(苧)  
降雪時外出用外被



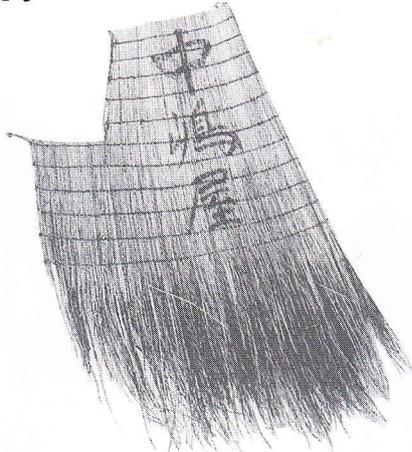
マエマワシ 1-1-5  
長さ83cm 840g  
ヒロロ(ミヤマカンスゲ)  
降雪時作業用前当



メエアテ 1-1-6  
長さ85cm 510g  
シナ皮 降雪時作業用前当



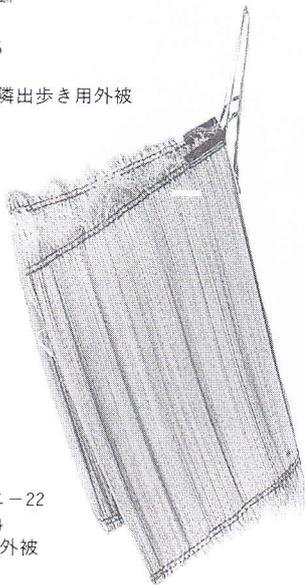
■スゲボシを被った子供たち



スゲボシ 1-2-14  
丈119cm 667g  
スゲ(タヌキラン) 近隣出歩き用外被



スゲボシ 1-2-15  
丈107cm 855g  
スゲ(タヌキラン) 近隣出歩き用外被



キゴザ 1-2-22  
丈81.7cm 355g  
藁草 ゴザ利用外被

## ② 外套類

雪中の<sup>がいひ</sup>外被として、古くから日常的によく用いられたのはスゲボシである。野生の菅(タヌキラン)を採って自製するが、ワラボシと呼ぶ藁製のものもある。スゲボシは軽く、吹雪の際には全身を包めるので、老若男女ともに着た。キゴザも手軽な外被だが、主として道中用であった。

明治末期ごろから、毛織物のケット・マント・<sup>がいとう</sup>外套・<sup>にじゅうまわ</sup>二重回し、女性専用のカクマキが商品として普及し、近年では多彩なアノラックの類が全盛となった。ネンネコは幼児を負ぶう時の和服型の防寒外被である。



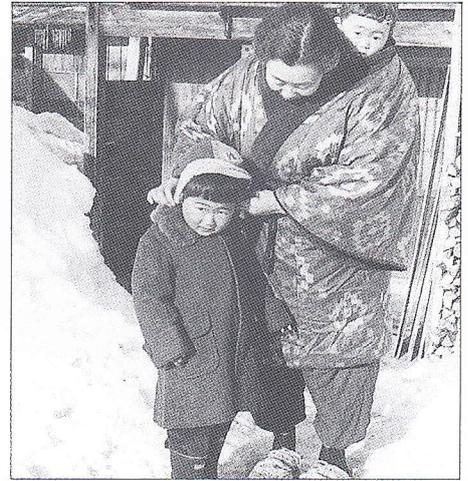
カクマキ 1-2-25  
丈85.5cm 幅185cm 585g  
羊毛 毛布状外被(角巻) 女物



マント 1-2-34  
丈112.5cm 2,325g  
ラシャ マント 男物



■カクマキをまとった女性



■ネンネコ姿の女性と子供



ニジュウマワシ |ーニー-42  
身丈124.5cm 1,730g  
ラシャ 和装用外被(インパネス) 男物



マント |ーニー-39  
身丈65cm 1,055g  
ラシャ マント 女児用



ネンネコ |ーニー-57  
身丈85cm ゆき62.7cm 790g  
木綿 幼児背負時半纏



ガイトウ |ーニー-50  
身丈105cm ゆき42cm 970g  
ラシャ 和装用外被(半コート) 男物



ガイトウ |ーニー-51  
身丈108cm 1,260g  
ラシャ オーバーコート 男物



ガイトウ |ーニー-55  
身丈63.5cm 515g  
ラシャ オーバーコート 男児用

# ホ 裁縫・洗濯用具

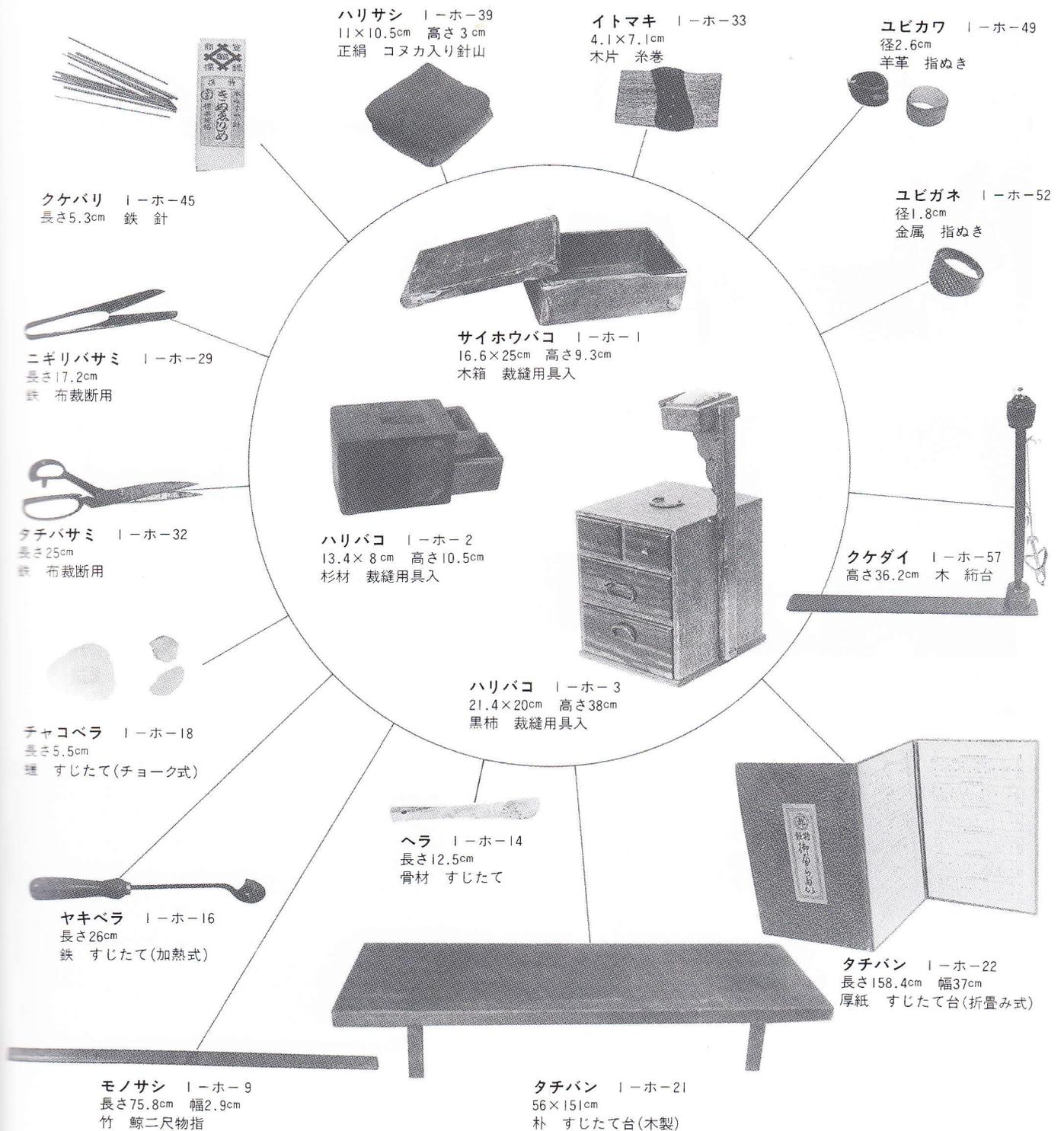
## ① 裁縫用具

裁縫は専ら女性の仕事であった。そして、裁縫は冬季に集中することが多かった。農家の主婦は、無雪期は畑仕事・田んぼ仕事・養蚕にと、農作業に追われる毎日であったから、針を持つ暇もないのが実情だったのである。したがって、農閑期の冬がそれに充てられたのである。

裁縫とはいっても、その大半は繕いもので、それをツツコト（繕ぎこと）<sup>つくろ</sup>といっていた。大事にし<sup>こま</sup>まわっておいで小切れ布と裁縫箱を手元に、クケダイ代りに炬燵布団に糸を取りつけ、皿のついたユビガネ（指ぬき）をつけ、

老眼鏡をかけて、髪の毛を入れた針さしに刺していた太い針で丹念に縫い、歯で糸を切る。そんな田の姿をこの用具から思い出す人も今は少なくなった。

十日町は織物の街・着物の街だから、もう一つの思い出を持つ人もいるだろう。裁縫も機織りとともに生業であったから、娘たちにとってその技術を身につけることは花嫁修業の一つであり、針箱は嫁入道具としても大切なものであった。そうした用具類も、たとえばビノシ・ヤキゴテ・炭火のアイロンなどに見られるように、近年になって大きく移り変わった。

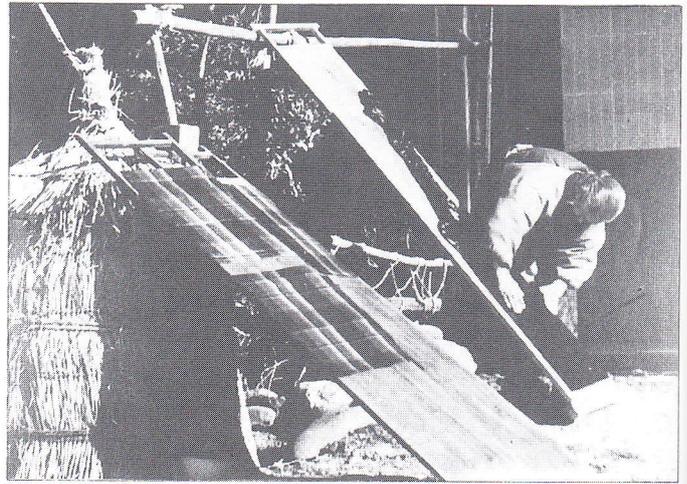


嫁のくらし

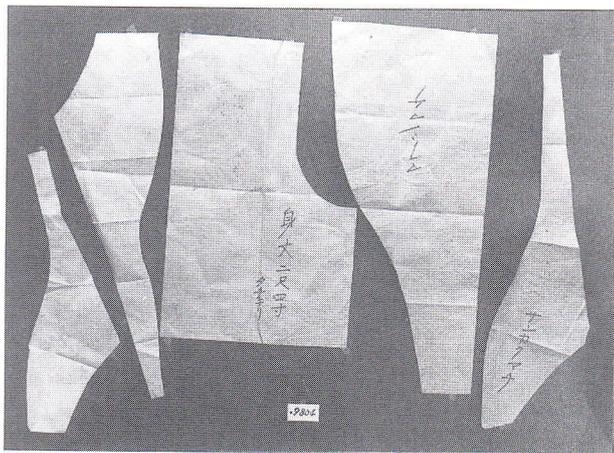
私がここへ嫁に来たんは18んどきです。亭主の顔も知らんで、そのころ親がみんな決めたんそね。昼間あ男衆と野良仕事、夜さあ毎晩あしたのアンボのイスス挽き。

冬は百姓仕事は無いけど、姑を手伝って炊事。なんでもハイハイとね、ヒビ切らして。身重になったりね、子どもの手はかかるし、それで機織りもしました。自分の体になるのは寝たときと便所へ入ったときだけさね。

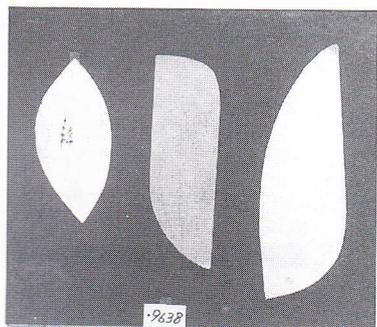
一番の楽しみは秋始末が終った後と春仕事のはじまる前のセツタク泊りに実家へ行った時。親にみんなしてもらって、小づかいせびって…今年85歳になりますて…。



■洗濯物を板張りするようす



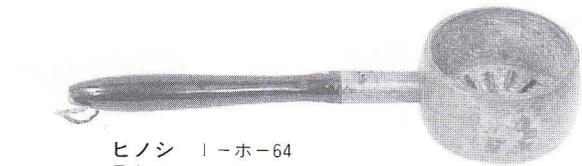
カタガミ 1-ホ-24  
和紙 股引用型紙



ソデガタ 1-ホ-26  
38.7×13cm(右)  
厚紙 袖の丸みを出す定規



ソデガタ 1-ホ-27  
8.8×8.5cm(左) 7.3×8cm(右)  
真鍮 袖の丸みを出す定規



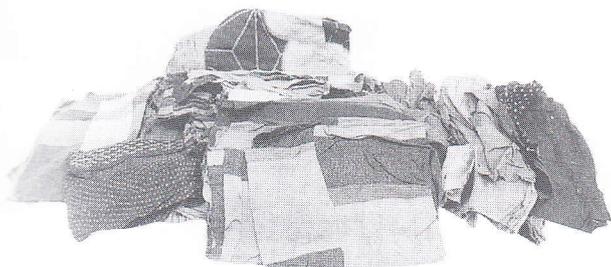
ヒノシ 1-ホ-64  
長さ37.5cm 665g  
真鍮 布のしわ伸し用



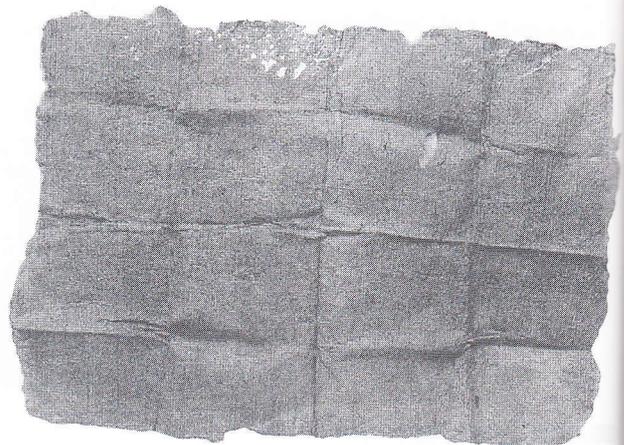
コテ 1-ホ-65  
長さ36.5cm 229g  
真鍮 布のしわ伸し用



アイロン 1-ホ-67  
長さ17.3cm 高さ16.7cm 1,035g  
鉄 布のしわ伸し用(炭火利用)



ハギレ 1-ホ-72  
木綿他 服補修用端切れ布



ウチワタ 1-ホ-74  
174×121cm 345g  
苧屑 カラムシ屑利用の代用綿

## ② 洗濯用具

洗濯用具は、夏も冬も同じで、ハンギレの洗濯<sup>たらい</sup>盤（上下用を別にしていた）を用い、石けんの入手しにくいころはアクタレ桶で作った灰汁に浸しておいて洗った。

積雪期の洗濯で困るのは、それを乾燥する干場であった。冬季は晴天の日が少なく、日照時間も短い上に陽はかげり易い。また、乾燥しなくてはならないものは洗濯物だけではなかった。男たちの雪中仕事や子供の雪遊びで濡れた履物や着物も毎日乾かさなくてはならないし、さらに幼児がいれば、オシメや下着を次々と濡らす。

そこで工夫したのが陽の当たる場所を追って移動できる物干で、枝つきの林の木などで作ったマタンザオ一對を雪に突立てて横竿を渡し、そこに干物を掛ける。

イロリ<sup>わらくつ</sup>の火もまた貴重な熱源である。濡れた藁<sup>わら</sup>などには火棚で干すが、衣類などは、イロリの中に細竹などを組んで立てて仮の干場とし、それに掛けた。オシメはイロリでは干せないので、シメシカゴを常置して用いた。

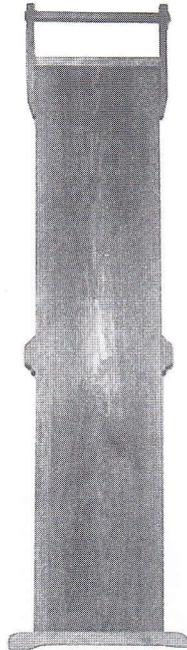
着物の洗い張りや仕立て直しもこの時期に集中する。春先、日差しも強くなると門先で板張りをする姿がよく見られた。春の農繁期がもうすぐ来るのである。



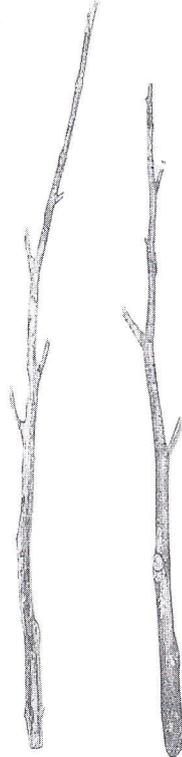
センタクイタ 1-ホ-78  
52.4×22.4cm  
ブナ 洗濯板



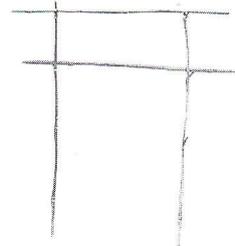
ハンギレ 1-ホ-76  
口径54cm 高さ24cm  
杉 洗濯盤



ハリイタ 1-ホ-91  
長さ199.4cm 幅38.9cm 5,420g  
カツラ 洗い張り用板



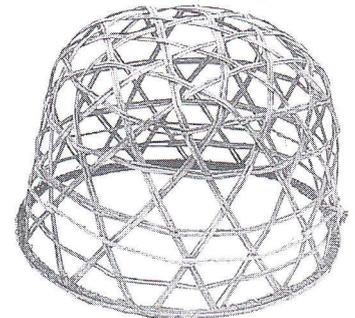
マタンザオ 1-ホ-83  
長さ282cm 1,940g (左)  
朴 雪中に立てる物干竿(又木利用)



トリイ 1-ホ-92  
高さ66.3cm  
竹・自然木 物干用



オッタテ 1-ホ-94  
長さ104cm  
山竹 物干用



シメシカゴ 1-ホ-97  
口径86cm 高さ58.4cm  
竹 中に火鉢を置きオシメを掛けて乾かす

## 昔の洗濯



洗濯物は灰汁に2~3日浸しておき、洗濯板にこすり合せて洗う。川まで背負っていき、よくすすいだ後しぼる。



天気の良い日は風通しの良い雪上にマタンザオを立て、横竿をわたして洗濯物を掛けて干す。

## ●衣生活用具品目一覧 <計569点>

イ、被物 ●普段用：テスグイ・ヤマガサ・シュロボシ・フナヅコ・ケイトボウシ・スキーボウ・キンカボウシ・ボウカンズキン・ボウカンボウ・オコソズキン ●儀礼用：オビギズキン・ワタボシロ、着物類 ●短着（普段着）：ヤマノノコ・ヤマアワセ・ワタイレバンテン・ハンチョウ ●長着（普段着）：ブイトウ・ケツブイトウ・ナガアワセ・ナガワタイレ・タンゼン（晴着）：ワタイレモンツキ・ヨメイリギモン ●上着：アワセバオリ ●下着：アイギ・ジュバン・ハダギ・ヤマシャツ・シャツ ●袖無類：ソデナシ・チョッキ・ワタコ・カメノコ・セナカアテ・セナコウジ・セナカアテ（兔毛皮） ●首巻類：クビマキ・カタカケ ●褌類：タスキ ●手甲類：テッコ・ウデスキ・テブクロ ●子供着：ウブキ・オビギ・コドモアワセ・コドモワタイレ・コドモモンツキ・コドモハオリ・コドモバンテン・チャンチャンコ・ハラアテ ●褌・腰巻類：フンドシ・コシマキ・ミヤココシマキ・ケイトパンツ・シメシ ●股引類：モモヒキ・アワセモモヒキ・モモヒキ（メリヤス）・ヤマバカマ・サンバク・モンベ ●帯類：サンジャク・ヘコオビ・ヤマオビ・ハンハバオビ・ナゴヤオビ・フクロオビ・コシヒモ・オビジタ・オビマクラ・オビアゲ・オビジメ ●前掛類：ヤママエカケ・フタハバマエカケ・マエカケ・コシブトン・マエカケ（子供用） ●脛当類：ハツパキ・キャハン・カイキキャハン・マキキャハン・フクロキャハン

ハ、履物 ●外履用（藁製履物）：ワラグツ・ノグツ・シブガラミ・イタチ・スッポン・クツズッポン・オソカケ・ツマカケ・ワラジ・スッペ・コウカケ（木製履物）：ハコゲタ・ユキゲタ・アシダ（内履用）：スッペゾウリ・タビ

ニ、雨具・防寒具 ●蓑類：ミノ・マエマワシ・メエアテ・マミノ・スゲボシ・タツノケボウシ・キゴザ ●外套類：ケット・カクマキ・マント・ニジュウマワシ・ガイトウ・アノラック・ネンネコ ●傘類：カラカサ

ホ、裁縫・洗濯用具 ●裁縫用具：サイホウバコ・ハリバコ・モノサシ・ヘラ・ヤキベラ・チャコベラ・タチバン・カタガミ・ソデガタ・ニギリバサミ・タチバサミ・イトマキ・ハリサシ・マチバリ・スイバリ・クケバリ・トジバリ・ユビカワ・ユビガネ・クケダイ・ヒノシ・コテ・アイロン・アテスノ・ハギレ・ウチワタ ●洗濯用具：ハンギレ・センタクイタ・スノブクロ・ミズキリカゴ・マタンザオ・ヨコザオ・マタボウ・ハリイタ・トリイ・オッタテ・シメシカゴ